「UDCO REPORT——まちを紡ぐ」#007
2023年度活動報告
特集：スクール・アーバニズム
–
2024年3月30日発行
–
編集・発行：
アーバンデザインセンター大宮［UDCO］
–
後援：
さいたま市
–
編集協力：
和田隆介
–
デザイン：
刈谷悠三＋角田奈央／neucitora
–
写真撮影協力：
工藤裕之、島崎信一、鈴木忍、森本絢
–
印刷：
高速印刷株式会社

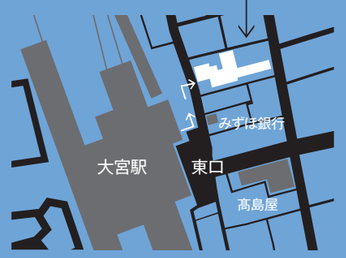
問合せ先：
アーバンデザインセンター大宮
URBAN DESIGN CENTER OMIYA
330-0802 埼玉県さいたま市大宮区宮町1丁目60番地
大宮ラクーン8階まちラボおおみや内
TEL: 048-782-9679
FAX: 048-782-9680
E-MAIL: info@udco.jp
WEBSITE: www.udco.jp
Facebook: www.facebook.com/UrbanDesignCenterOmiya/
X: twitter.com/udco_info
Instagram: www.instagram.com/udco_info/

URBAN DESIGN CENTER OMIYA

–

©2024 UDCO All Rights Reserved

大宮ラクーン 8F｜まちラボおおみや内



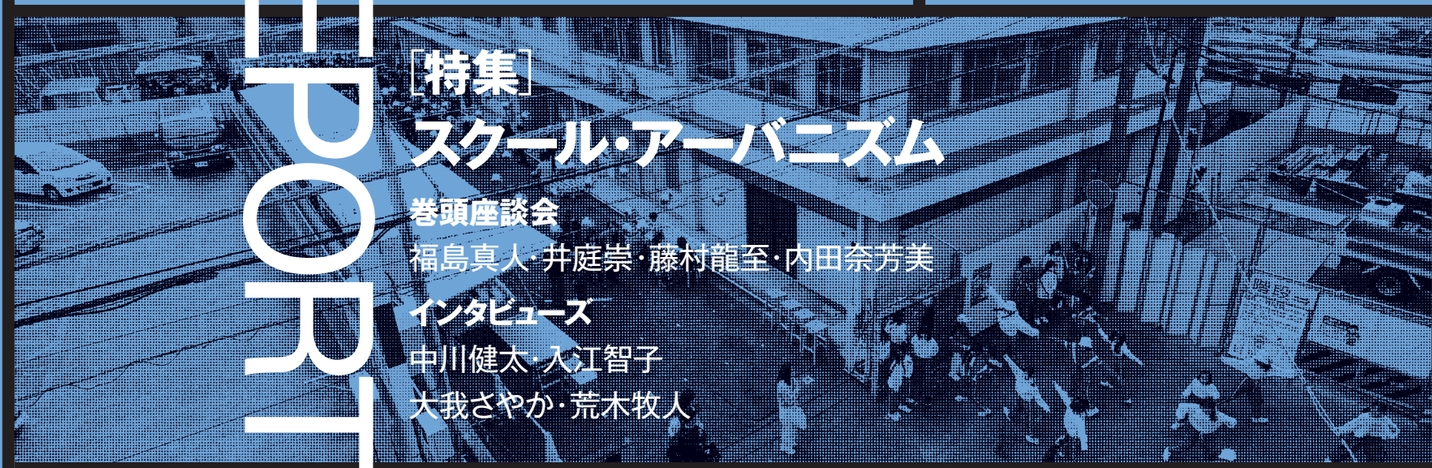
まちラボおおみやは株式会社浜友商事の
ご協力により提供いただいているスペースです。

UDCO REPORT #007

UDCO REPORT #007 まちを紡ぐ

2023年度活動報告

2023●



［特集］
スクール・アーバニズム
巻頭座談会
福島真人・井庭崇・藤村龍至・内田奈芳美
インタビューズ
中川健太・入江智子
大我さやか・荒木牧人
→04

［活動報告］
ストリートから大宮の文化を育む
ストリートデザインスクール｜ストリートマーケット｜ストリートプランツ
ストリートランチ｜ポップアップ｜マチミチミーツ｜ストックツアー
→16

URBAN DESIGN CENTER OMIYA

UDCO URBAN DESIGN CENTER OMIYA

●アーバンデザインセンター大宮

●おおみやインフィニティ[∞]プロジェクト

ストリートでつながる点→線→面
UDCO展開期の戦略

–

UDCOでは、「大宮駅周辺地域戦略ビジョン」(以下、ビジョン)のもとに進められている都市再生事業をつなぐ鍵は"ストリート"であると考え、UDCO初動期からストリートテラスをはじめとした街路沿道利活用に取り組んできた。展開期となる2020-2022年では、ビジョンの実現に寄与していくための戦略として、ストリートにおける取り組みを面的につなげる「おおみやインフィニティプロジェクト」を構想した[**図1**]。このプロジェクトの戦略・展開は次の通り。

1. 主要回遊動線=「インフィニティストリート」を設定
2. インフィニティストリートでストリートテラスなどの取り組みを展開
3. ビジョンに掲げる「おもてなしひろば」「おもてなし歩行エリア」を実現、暮らしの質とエリアの価値向上を図る
4. 都市再生事業である「おもてなしまち再生」「連鎖型まちづくり」と連動、大宮らしい新たな日常を目指す

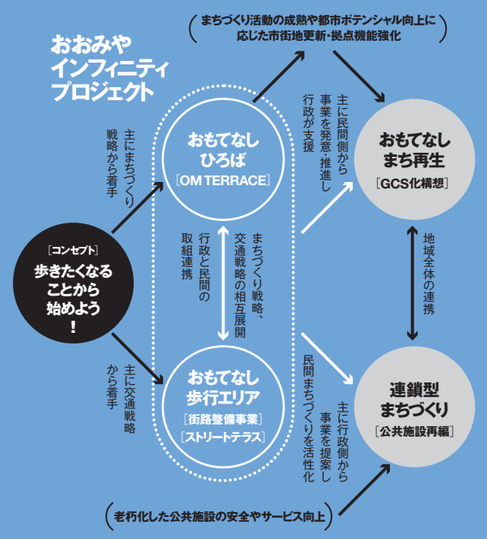
–

「インフィニティストリート」は、大宮駅(グランドセントラルステーション化構想、以下GCS化構想)、公共施設再編3地区(大宮区役所、旧大宮区役所、旧大宮図書館など)、大門町2丁目再開発、氷川参道、中央通り、一の宮通りなどの拠点をつなぐ役割をもつ[**地図**]。大宮らしい暮らしがこの動線で日常的にかつ持続的に営まれること、また、動線が「∞」の字に見えることから「インフィニティストリート」と名付けた。

–

施策としては、インフィニティストリートを国土交通省が定める「まちなかウォーカブル区域」に位置付け、「まちなかウォーカブル推進事業」として戦略的に進めていくことが考えられる。このような他事業と組み合わせながら、インフィニティストリート沿いで重点的・積極的に取り組みを進めることにより、点(拠点)を線(ストリート)で結ぶことによって、奥行きのある面(まち)へとつながっていく。ストリートごとの特性を活かしたアクションにつなげていくために、これからも大宮の皆さまとともに取り組んでいきます!

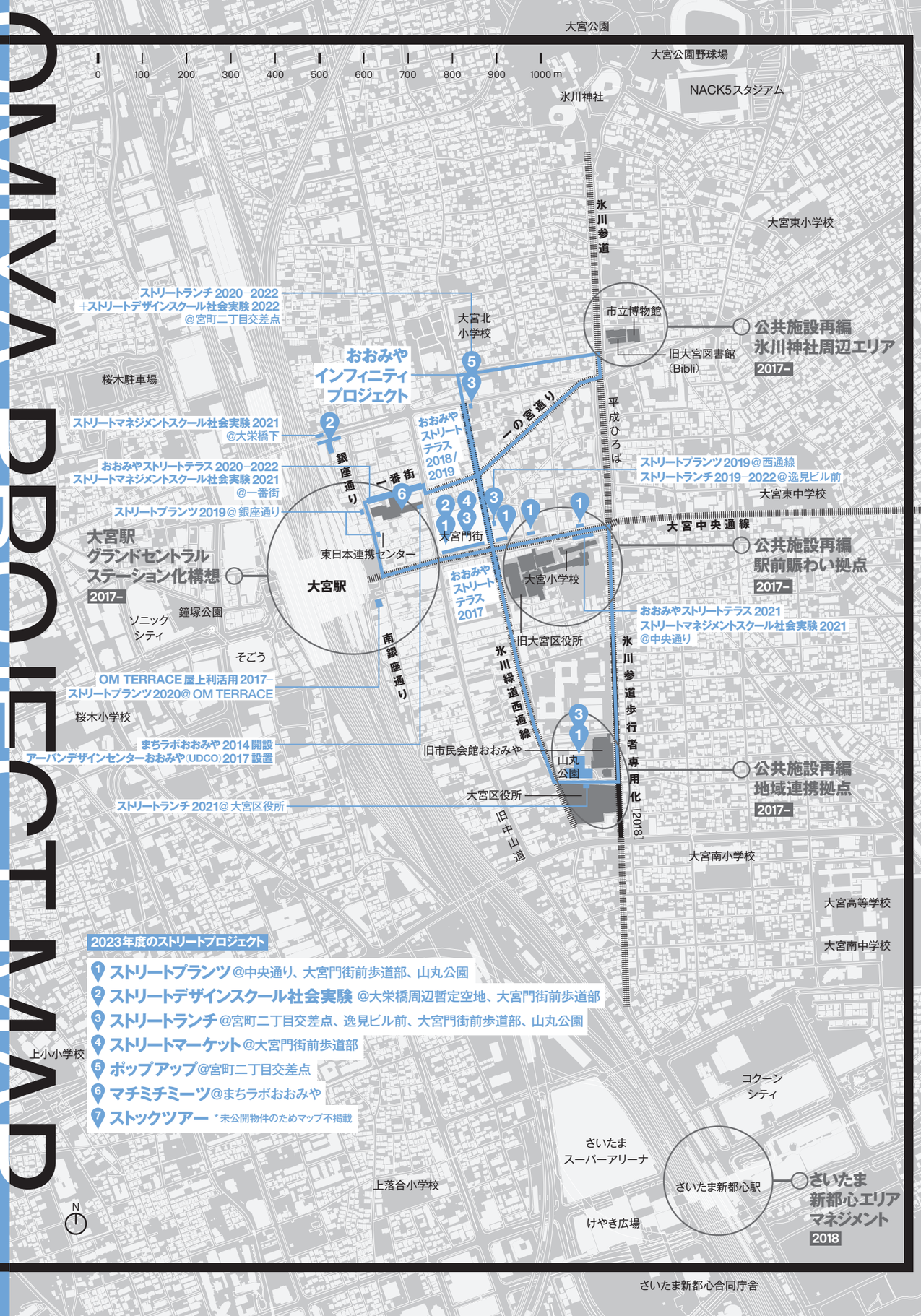
図1

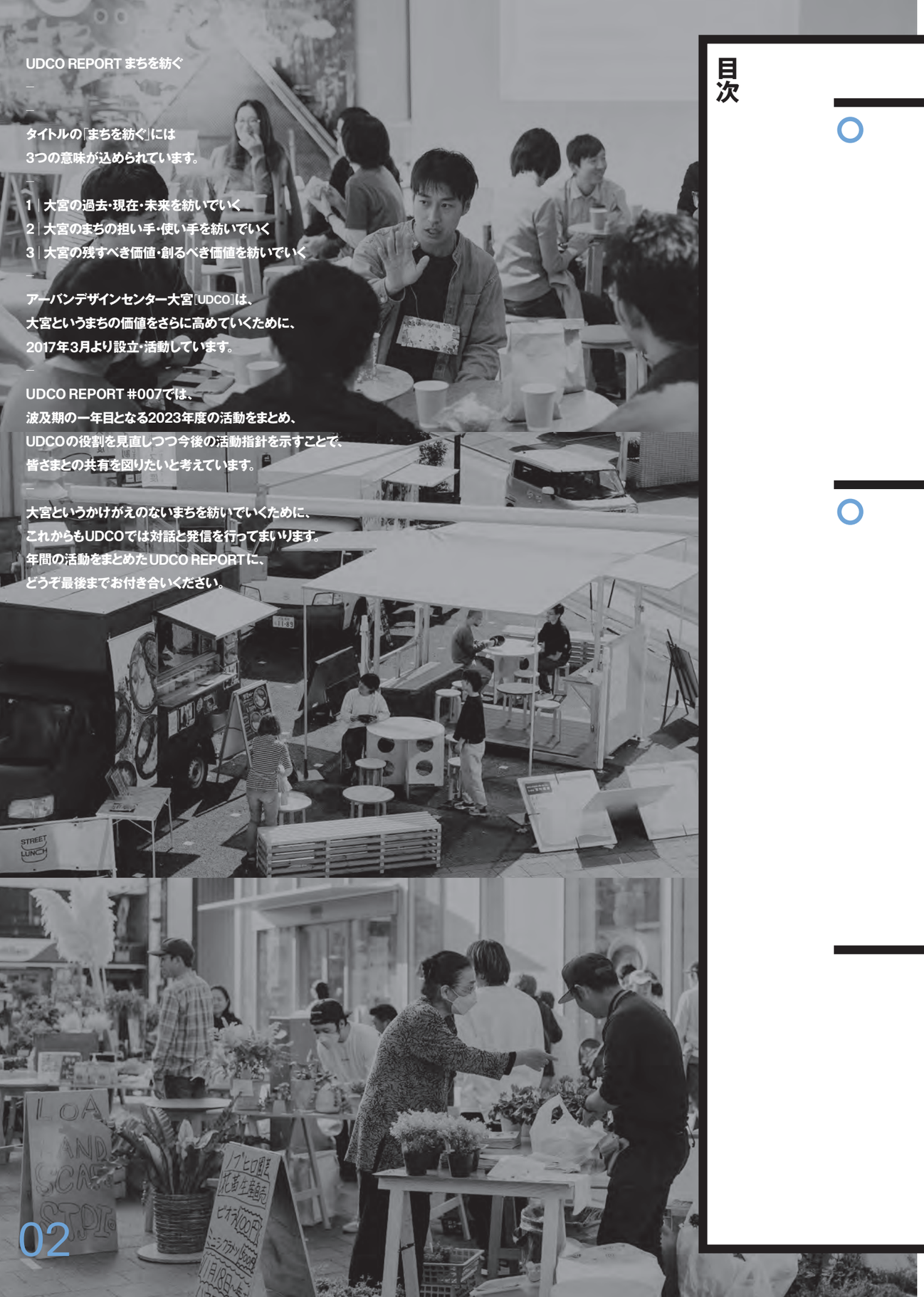


[大宮駅周辺地域戦略ビジョンp.51「優先的に取り組むべきプロジェクトの設定」をもとに作成]

大宮プロジェクトマップ

OMIYA PROJECT MAP





UDCO REPORT まちを紡ぐ

—

—

タイトルの「まちを紡ぐ」には
3つの意味が込められています。

—

1 | 大宮の過去・現在・未来を紡いでいく
2 | 大宮のまちの担い手・使い手を紡いでいく
3 | 大宮の残すべき価値・創るべき価値を紡いでいく

—

アーバンデザインセンター大宮［UDCO］は、
大宮というまちの価値をさらに高めていくために、
2017年3月より設立・活動しています。

—

UDCO REPORT #007では、
波及期の一年目となる2023年度の活動をまとめ、
UDCOの役割を見直しつつ今後の活動指針を示すことで、
皆さまとの共有を図りたいと考えています。

—

大宮というかけがえのないまちを紡いでいくために、
これからもUDCOでは対話と発信を行ってまいります。
年間の活動をまとめたUDCO REPORTに、
どうぞ最後までお付き合いください。

目次

［特集］ 04
学びの場から街路文化をつくるスクール・アーバニズム

#1 特集趣旨 04

#2 | 座談会 | ストリートで実験せよ 06
予定調和に陥らないまちづくりの方法論とは
福島真人・井庭崇・藤村龍至・内田奈芳美

#3 | インタビューズ | 公と民が出会うふたつのスクール 10
- 公の個性を引き出し、多様な公民連携を切り開く
  都市経営プロフェッショナルスクール | 中川健太・入江智子
- 民のパブリックマインドの醸成がまちを動かす
  まちづくりキャンプ | 大我さやか・荒木牧人

［活動報告］ 16
ストリートから大宮の文化を育む

#1 STREET DESIGN SCHOOL | ひととまちが出会い魅力が育つ学びの場 17
- ストリートデザインスクール@大宮
- 社会実験 #1 BACKSTREET (DANCE) PARK
- 社会実験 #2 Nakasendo Chrono Market

#2 STREET TERRACE | ひととまちの出会いを生むストリート利活用の実践 25
- ストリートマーケット
- ストリートプランツ
- ストリートランチ
- ポップアップ

#3 STREET LOCAL NETWORK | ひとがまちの魅力に出会う機会づくり 35
- マチミチミーツ
- ストックツアー
- 産官学民連携／まちラボおおみや／OM TERRACE／UDCO PAPER／UDCO REPORT

- UDCO年表2023 | ビジョン推進と日常化に向けた仕組みづくり 42
- UDCOアクションプラン #006 | 大宮駅周辺地域戦略ビジョンの推進に向けた仕組みづくりへ 44
- 2023年度のふりかえり／2024年度に向けたUDCOの思い 46
- ABOUT UDCO 48

SPECIAL FEATURE

[特集] 学びの場から街路文化をつくる スクール・アーバニズム

1999年より国土交通省が推進する“社会実験”は「地域におけるにぎわいの創出、まちづくりまたは道路交通の安全の確保等に資するため、(中略)道路施策の導入に先立って、関係行政機関、地域住民等の参加のもと、場所や期間を限定して当該施策を試行・評価し、もって新たな施策の展開と円滑に事業を執行することを目的とするもの」と定義される[*1]。当初は道路空間の再分配を目的とした実験(歩道の一時的拡大による自動車交通への影響の測定等)や新地域交通システムのトライアルなどの土木・交通領域を中心としていたが、昨今ではウォーカブルの推進を背景として滞在空間の整備やマーケットなどの取り組みを行う「利活用」に軸足を移している。

そのようななかで、はじまりから四半世紀を迎える社会実験は、郊外都市における中心市街地活性化から大都市における都市再生の文脈まで、多様に意味合いを広げているが、一時的な賑わいを生み出すためだけのイベントと区別がつかない取り組みや、実験すること自体が目的化した取り組みもあり、その意義や目的は掴みにくくなっている。実験を担う主体は行政と地域のまちづくりの関係者に限られ、市民が参加する機会が十分に開かれていないケースもある。
コミュニティが希薄化した道路空間の活用を契機とし、まちのネットワークを再構築することで、地域課題を改善するための社会・制度の漸進的な変化や、新たな街路文化の醸成を、私たちはいかに生成していくことができるのだろうか。社会実験を新たな視点で捉え直すことは、その鍵となるのではないか。

UDCOは2017年から公共空間利活用の社会実験を繰り返すなかで、ストリートにまつわる課題解決や新たな価値創出に取り組んできた。2021年より展開する「ストリートデザインスクール」は、知識の伝授や参加者のネットワーキングにとどまらず、実際にまちのコミュニティに働きかけ、課題や利活用の可能性を掴みとり、公共空間の利活用実験までの過程をすべて参加者に開いた実践型プログラムである。そして、全国のまちづくりの現場において、公と民が混ざり合う場としてこうした「スクール」という型が増えており[*2]、その可能性が注目を集めている。

あらためて「参加すること・学ぶこと・実験すること」の関係や意義を、まちづくりやアーバニズムの観点から捉え直してみたい。社会学や人類学の成果のなかにヒントを探ると、学習を「“実践共同体”における周辺から中心へと向かう参加の過程」と捉える視座[*3]や、社会における実験やそれを可能とする社会的な領域の重要性についての指摘[*4]などが挙げられる。

本特集では「社会実験」を“学びとはなにか”の探求から捉え直し、漸進的な社会変化を生成する鍵となる場/組織として「スクール」を再定義する。開かれた「実践共同体」としてのスクールとはなにか、現在の都市における「実験的領域」はどこにあり、どのような質を備えているのか、まちや人との関わりから、いかに変化を生成することができるかを問う。そしてスクールからストリートの文化を生み出すプロセスを「スクール・アーバニズム」と呼び、実践者や有識者との座談会、インタビューを通じてその可能性を検証する。

座談会 | ストリートで実験せよ—予定調和に陥らないまちづくりの方法論とは—

pp.06–09

スクールの意義、そして社会実験の意義とはなにか? 社会における「学習」「実験」の意味や価値について研究され、「学習の生態学」の著者である福島真人氏と、教育現場でのアクティブラーニングの実践から「ジェネレーター」の意義について発信・実践する井庭崇氏をお招きして、UDCOの取り組みを再考する。

福島真人『学習の生態学——リスク・実験・高信頼性』(東京大学出版会、2010)

市川力+井庭崇『ジェネレーター——学びと活動の生成』(学事出版、2022)

インタビューズ | 公と民が出会うふたつのスクール

pp.10–15

人が出会い、ともに学び、まちに変化を生み出す起点となるふたつのまちづくり関係スクールについて、運営者や受講者にインタビューを行った。背景や特徴、そして一人ひとりにとってどのような学びの経験となったのかをうかがい、「スクール」という共同体の可能性について考える。

● 都市経営プロフェッショナルスクール

公の個性を引き出し、多様な公民連携を切り開く

受講生が自らの公民連携事業推進のために、行政・民間双方が必要なノウハウを学ぶ場として、
2015年に開講された公民連携プロフェッショナルスクール。
現在は都市経営プロフェッショナルスクール「公民連携事業課程」として
全国の公民連携事業の実践者を輩出し続けている。
創設初期の卒業生であり、まちづくりをリードする中川健太氏と入江智子氏に
スクールの意義をうかがった。

● まちづくりキャンプ

民のパブリックマインドの醸成がまちを動かす

空き店舗や空き家のリノベーションなどを通じて、
魅力あるまちの将来像を描くワークプログラム「まちづくりキャンプ」。
まちに眠る「空間」と「コンテンツ」の再発見を掲げるスクールが示唆するまちづくりについて、
運営者としての関わりをもつ大我さやか氏と受講者である荒木牧人氏のふたりに語っていただいた。

*1——国土交通省webサイト「社会実験とは」(https://www.mlit.go.jp/road/demopro/about/about01.html)
*2——2011年にスタートし全国的に展開される「リノベーションスクール」をはじめ、まちづくりの現場にはさまざまなスクールがある。継続的なまちづくり活動のノウハウなどを水平展開する普及啓発事業(国土交通省)等の仕組みによる支援もあり増加している
*3——ジーン・レイブ+エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』(佐伯胖訳、福島真人解説、産業図書、1993)。学習の個人心理学的な色合いを払拭し、社会学的な概念群に置き換える視点を提示した本書は、伝統的な徒弟制からヒントを得つつ、学習を“実践共同体”における周辺から中心へと向かう参加の過程と定式化している
*4——福島真人『学習の生態学——リスク・実験・高信頼性』(東京大学出版会、2010)。社会におけるさまざまな「実験」に関する人類学的調査の成果を踏まえ、現在の社会で実験がいかに困難であるかを示し、実験を可能とする社会的な「学習の実験的領域」をいかに確保するかが喫緊の課題であると述べている

座談会 ストリートで実験せよ

予定調和に陥らないまちづくりの方法論とは

話者

福島真人 | 東京大学大学院・情報学環教授

井庭崇 | 慶應義塾大学総合政策学部教授

藤村龍至 | UDCO副センター長、東京藝術大学准教授

内田奈芳美 | UDCO副センター長、埼玉大学教授

福島真人 | ふくしま・まさと | 1 | 東京大学大学院・情報学環教授 | 1958年東京生まれ。1988東京大学大学院博士課程単位取得退学(学術博士)。1998年より東京大学大学院総合文化研究科准教授(後教授)。2021年より、東京大学大学院情報学環教授。専門は、科学技術社会学(STS)。質的、民族誌的方法を中心に、科学技術と政治、アート、宗教といった諸分野との相互関係を研究する。著書に、『真理の工場』(東京大学出版会、2017)『学習の生態学』(ちくま学芸文庫、2022)『「実験」とは何か』(東京大学出版会、近刊)ほか。

井庭崇 | いば・たかし | 2 | 慶應義塾大学総合政策学部教授 | 1974年生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業後、2003年同大学大学院政策・メディア研究科博士課程修了。博士(政策・メディア)。株式会社クリエイティブシフト代表取締役社長、パターン・ランゲージ国際学術機関 The Hillside Group 理事を兼務。専門は、創造実践学、パターン・ランゲージ、システム理論。著書に『パターン・ランゲージ』(慶應義塾大学出版会、2013)『クリエイティブ・ラーニング』(慶應義塾大学出版会、2019)『ジェネレーター』(学事出版、2022)ほか。

1

2

スクールの意義、そして社会実験の意義とは何か? 社会における「学習」「実験」の意味や価値について研究されている福島真人氏と、教育現場でのアクティブラーニングの実践からジェネレーターの意義について発信・実践する井庭崇氏をお招きして、UDCOの取り組みを再考する。

社会実験の成功と失敗

◎ **藤村** | 福島先生は「実験」の研究において、「失敗」をどのように位置付けるかという問題を挙げていらっしゃいます。「社会実験」は社会であるがゆえに公共性があり、成功例のみを記録に残そうという風潮があることも指摘されていますね。

◎ **内田** | 例えば、ストリートデザインスクールは「実験の実験」という側面もあり、社会実験をスクールで「実験的に」学ぶという二重性があります。また福島先生は研究で「社会実験」という言葉の曖昧さを指摘されていますが、たしかに「社会実験」と銘打てば異論を挟みにくく、トライアンドエラーが許容される度合いが高まるのも事実です。

● **福島** | 社会実験には「行政」と「実験」が関係をもつ場面も少なくないために、その関係をどう捉えるかという難しさがあります。行政は失敗しない、という暗黙の信念は、米国のようなプラグマティズム本家の行政学でも長いこと問題視されなかったようで、こうした柔軟な姿勢を取り入れるようになったのは比較的近年だという歴史研究もあります。しかし実験は失敗することで予期しない結果を生み、それがメルクマールにもなる。またひと口に社会実験と言ってもさまざまで、ボトムアップが比較的容易な「建築」系と、ひとつのシステムが全体に波及する「交通」系とでは実験という言葉の具体的なイメージはかなり異なると思います。大宮駅とストリートを連動させるUDCOはその調整ができたら成功なのでしょうね。ぜひ観察したいところです(笑)。失敗を報告しにくい風潮ですが、科学技術社会学(STS)では、失敗とはそもそも誰にとっての失敗なのか、という議論が盛んになされています。例えば車の公開衝突実験で爆発しないはずの車が爆発してしまったという例では、メディアはこれは失敗だと大騒ぎするが、エンジニアはそこに気がつかなかった盲点があることに気がつきます。そうした失敗は情報の宝でもあるわけです。こうした難しさは、H3ロケット打ち上げ時のメディアの反応でも顕著ですが。社会実験の難しさは、誰の視点で見た失敗あるいは成功なのか、というところにもあるでしょう。メディア、行政、地域社会研究者、当事者では失敗の定義が異なるので、どのようにすり合わせをしていくかということも課題の一つですね。

◎ **藤村** | まちづくりでも、その時の感覚としては正しかったかもしれないけれども、時代が変わると失敗に見えてくることが多々あります。例えば、交通の立体化が大事という時代があれば、今では平面で人が主体というように、パラダイムは変わってきます。建築界では当事者同士で議論をするのですが、まちづくりには評論という側面が弱いのかもしれません。

総合的な探求を導くジェネレーター

◎ **藤村** | 井庭先生の取り組みにも大きな示唆をいただきました。まちづくりで言えば、建築家やアーバンデザイナーがリードするのではなく、一参加者としてのジェネレーターが議論に飛び込んで探究学習欲を深めながら、プロジェクトが有機的に発展する、ということですね。日本のまちづくりの現場では井庭先生が提唱されるところのジェネレーターは少ないように思います。

◎ **内田** | UDCOは中立的立場で発言を引き出し、進行するファシリテーターを務めているところもあるので、参加者としてのジェネレーターという立場への意識は重要ですね。井庭先生がクリストファー・アレグザンダーのパターン・ランゲージを、創造的な学びの秘訣を言語化するものとして教育の場で応用されているのも興味深いです。

● **井庭** | ジェネレーターは、発見やコミュニケーションの連鎖を巻き起こしながら生み出していく人です[図1]。その人が展開する活動に、ほかの人も魅了され、参加し、活動が広がっていきます。パブリックな場である「まち」をつくるということにおいても、公的なアプローチだけでは(それは必要なのですが)、特色のない面白味のない場になりやすい。そこでそれぞれのユニークな世界観をもつジェネレーターが、まちをよりよくしていくために動いていく、というのはこれからのまちづくりで重要なあり方になっていくのではないかと思っています。そうやって、いろいろな動きが生まれ、そのなかでよい実践だと思うものが出てきたら、それをパターン・ランゲージとして言語化することで、まちの人たちやほかの地域の人たちが、その実践の本質を学び、自分たちの活動に活かすことができる。そういう流れができるといいですね。

パターン・ランゲージは、よい実践(グッドプラクティス)の本質を言語化したものです。実践の本質とは、「コツ」(骨)と言ってもよく、それは実践を成り立たせるための軸です。よい実践をしている人にインタビューを行い、言語化して広く共有することで、ほかの人たちのさらなる実践を支援できます。パターン・ランゲージは半世紀前に建築分野で考案されたものですが、1990年代にはソフトウェアの分野に取り入れられ、さらに2000年代には人間の実践の本質を記述するために応用されるようになりました。僕も2009年に発表した「ラーニング・パターン」を皮切りに、学びやプレゼンテーション、コラボレーション、企画、子育てと仕事の両立、認知症のご本人やご家族がよりよく暮らしていくこと、高齢者施設のケアや場づくりなど、人間の実践に応用してきました。

民主主義を論じる宇野重規さん[*1]は、プラグマティズムの哲学者であるジョン・デューイの考えを参照しながら、民主的な社会を、一人ひとりがさまざまな実践をし、それを共有し合う社会[*2]であると捉え、それを「プラグマティズム型民主主義」と呼びました。この方向性に僕も共感しており、いろいろな領域のパターン・ランゲージをつくって配るのは、まさにそれを実際にしているのだと思っています。他者の実践の表層的な部分を真似るのではなく、その実践の本質をつかんだうえで自分の実践に活かす、そういうことがしやすいメディアが、パターン・ランゲージなのです。ですので、UDCOの大宮での実験が、地域特性や関わった人の特性に還元されて理解されるのではなく、その実践の本質が言語化されれば、ほかの地域にもその実践の本質が広まっていくのだと思います。

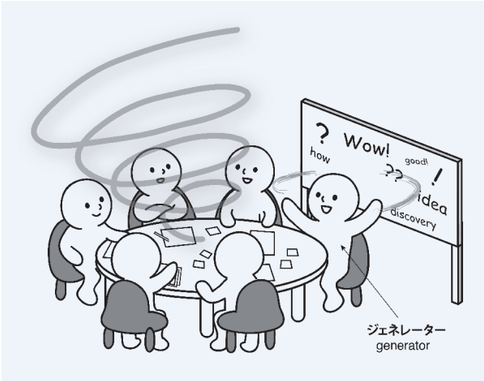


図1 ジェネレーターの概念図(提供:井庭崇)

トライアルの失敗からいかに学ぶか

◎ **藤村** | NYのブルームバーグ市政でジャネット・サディク=カーンNY市交通局局長が行ったウォーカブルを目指した数々の実験はプラグマティズム型民主主義に近いところがありますね。タイムズスクエアの交通実験で経済効果を実証しつつ、道を歩行者に取り戻す合意形成の手段としたことは、まさしくプラグマティズム型民主主義です。論理実証型ではなく、やってみたら悪い影響ではなかったからやっていこうというのが、最近の社会実験の傾向のひとつにあるように思います。そのうえでは、サディク=カーンのようなジェネレーターも必要なのですね。

● **井庭** | このとき「実験」というのを、論理実証主義的な科学の意味では捉えないことが重要だと思います。科学では、「実験」(エクスペリメント)は仮説の真偽を明らかにするための手段ですが、まちづくりにおいては実験を、あることを「試行してみる」(トライアル)ことだと位置付けるほうがよいでしょう。こうなるだろうという仮説が正しかったかどうかを明らかにするというよりも、どういうことが起きるのかを見る・知るために行う試行。まち・コミュニティへの影響や変化はすぐには明確に現れるようなものではないので、大きな効果が観測されなくても特段悪影響はなく、なんらかのよい兆候が感じられるということであれば「成功」と見なすこともできます。これは結果がクリアに出ないと「失敗」だったと判断され責任問題が追求されたり、それを恐れて動けなくなったりするよりよいと思うのです。そういう実験=試行が起きやすくなると、その実験=試行から自分たちもほかの地域の人たちも、学び、活かすことができるようになります。

◎ **藤村** | トライアルという言い方は偶然性(非線型性)を許容するものですね。ただ実験というと、今の社会ではどうしても実証性を求められてしまう。社会実験に変わる言葉が必要なのでしょうか。

● **福島** | 交通系はほとんどが実証実験ではないでしょうか。研究者としては期待から外れた状況への対応も観察したいのですが……。神奈川県鎌倉市では2003年に交通渋滞を

図2｜ストリートテラス

緩和するため交通実験を行いましたが[*3]、その一部がマスコミから総叩きにあうものの、批判についても踏み込んだ、非常に「厚い記述」を残していることを高く評価しています。逆に質問したいのですが、ストリートで実験をして、思わぬ結果が出たことはありますか?

◎ **藤村**｜「ストリートテラス」[図2]を実施した際に、最終日に売り物の緑を置いてもらったら居心地がよく感じられたので、そこから「ストリートプランツ」(pp.30-31)に展開していく、ということはありました。大宮は関東大震災で被災した植木職人や盆栽市が移住し、植木が地域産業であるという背景もあるのですが。

● **福島**｜仮説演繹では出てこない予期せぬ「外れ値」が面白い。例えばUDCOでは外れ値をもとに最初の計画を曲げることはありますか? もちろん行政との関係性もあると思いますが……。

◎ **藤村**｜トップ同士の合意を得たうえで、次の実験にフィードバックするということはあります。組織対組織ではないところで、外れ値を対象化していくことはできるかと。

◎ **内田**｜スクールの受講生に対しては、例えば地域住民に話を聞いてもらえなかった場合にどのように対応したか、そうした想定外のいわゆる「外れ値」を言語化して内面化する「ふりかえり」[図3]のプログラムを最終日に設けています。ただ翌年のスクールでは同じ人が同じ社会実験に関わるわけではないので、個人レベルでその想定外からの学びをフィードバックするのは難しいかもしれません。記録の厚みにはなるのですが。

● **井庭**｜社会実験では偶発的なことやうまくいかなかったことは記録・共有されにくいものですが、もしそれらも含めて、いろいろな経験が地域間で参照できるように公開されれば、そこから法則性やパターンを見出すこともできるようになります。普通に公に発表するときには、どうしても、よい結果を中心に発信することにならざるを得ないわけですが、だからこそ、試行錯誤の事例を、うまくいかなかった部分や想定外のことも含めて共有し合う仕組みができるといいですね。

● **福島**｜実験の歴史を遡れば、理論の随伴物としての実験という歴史記述や発想そのものに対する、STSや科学史からの反論、修正も盛んに行われており、科学史家のイアン・ハッキングは理論に基づかない実験的試みの多くの事例を記述しています。私自身も仮説演繹といった枠組では出てこないものに可能性を感じます。教育現場でも同様で、外れ値が出ること、そしてそれを扱う仕組みを学校教育のなかで教えていくことに期待したいですね。

まちに潜在的に眠っているものを発掘する

● **井庭**｜そういうふうに実際の試行の経験に基づいて、ふりかえり、学び、活かすということを、僕は大学の授業で行っています。まちづくりの事例ではないですが、イメージが湧きやすいと思うので、紹介したいと思います。その授業というのは、慶應義塾大学SFC(湘南藤沢キャンパス)で僕が担当している「ワークショップデザイン」という授業です。履修者がグループを組んで、ワークショップを考案・設計し、授業を受けている他の履修者に対して実施してみます。そして、その後に、みんなでそのワークショップの設計や実施についてふりかえり、語り合います(授業でどんなことをやっているのかを短い映像にまとめたものを公開しているので、ぜひ見てみてください「Workshop Design 2023 Reflection Movie」https://www.youtube.com/watch?v=r7fofqDSj44)。ふりかえりの時間には、別の可能性があったのか、どうやって思いついたのか——評価や批評ではなく発想ややり方について話しあいながら学んでいきます。UCDOのスクールでも、きっとそういうことが起きているのではないかと思います。

● **福島**｜あるアイデアを共有し模倣するのはひとつの手ですが、自分たち独自の方法論や独自の進化も必要ですね。UDCOでは独自性をどのように捉えていますか?

◎ **内田**｜UDCOには空間に携わる建築家が継続的に関わってきています。それがデザイン性をもった社会実験という性格を与え、空間に対するアプローチの違いから類似したスクールとは異なる個性をもたらしているのかもしれません。

◎ **藤村**｜スクールの受講生が社会実験のテーマを考えるなかで、見えづらい大宮の個性として古着屋やダンススクールが集積していることを観察から発見しました。ストリート空間においてそういったコンテンツを可視化することをUDCOで提案してみたところ、当事者が思いのほか面白がってくれて、マーケットは大盛況となりました。まちに飛び込んで得られた印象を対象化して反復をつくるところまでつなげれば、独自のカルチャーに発展していくのではと考えています。

● **井庭**｜まちの潜在的な特徴や、注目されていなかったものを見出して育てていくというのは、実によいですね。スクールで、短期だから、あるいは実験だから許容される、という強みを活かして、それを顕在的なものにして試してみるというのがいいですね。

◎ **藤村**｜スクールとしてオルタナティブな場をどうつくっていくか。実験、学び、パターンがクロスするポイントがあると思うのです。

● **福島**｜スクールの構造自体も日常の発見に応じて変えていく可能性もあるのでしょうか?

◎ **藤村**｜それはやっていかないといけない、と考えています。スクールというものにある種のパターンができており、内省的なことを受け止めるというパッケージになっていますので。別のエリアで別のトライアルを考えています。

◎ **内田**｜大宮のなかでも毎年検討するエリアが変わりますので、場所に紐づいた問題は必ず変化します。したがって同じものになることはなく、それぞれに対応した異なる方法論が生まれてくるのですね。その時にジェネレーターとしてインストラクターがついているので、現場対応的に学びを発展させられると考えています。一方でマンネリ化も一考すべきで、地域で学びあったほうがよいものの、その学びは特定のコミュニティだけの広がりになってしまうかもしれない。その点、井庭先生のジェネレーターの重要性を実感します。

◎ **藤村**｜大宮を契機として全国のまちへ関わることが増えてきました。ひとつとして同じまちはないとも言えるし、まちの構造の読み方や介入の仕方には意外なほど共通項が多いとも感じています。そこに井庭先生のおっしゃるような教育のワークショップの方法論を取り入れることは興味があります。早速次回のスクールから実践していきたいと思います。

[文=植林麻衣]

*1——東京大学社会科学研究所教授
*2——東洋経済ONLINE 2021年02月17日掲載インタビューより(宇野重規「民主主義にはそもそも論が必要だ」)
*3——江ノ電七里ヶ浜役周辺の駐車場を使用したパーク&レールライド実験や、公共交通乗り継ぎシステムに関する実験

図3｜スクール成果報告会

［インタビュー］公の個性を引き出し、多様な公民連携を切り開く

公民連携プロフェッショナルスクール（現：都市経営プロフェッショナルスクール）

話者

中川健太 | 岡崎市役所まちづくり推進課 QURUWA戦略係係長

入江智子 | 株式会社コーミン代表取締役

聞き手

伊藤孝仁＋高橋卓 | UDCOデザインコーディネーター

長谷川潤 | さいたま市役所都市局 都心整備部 大宮駅東口まちづくり事務所

中川健太 | なかがわ・けんた | 1 | 岡崎市役所まちづくり推進課QURUWA戦略係係長、(株)南康生家守舎サポーター | 1981年三重県伊勢市生まれ。2003年岡崎市役所に土木技師として入庁。水道局や河川課で公共施設の計画・設計・維持管理に携わる。現在はQURUWA戦略全体の推進を担当し、その立ち上げから11年間かかわり続ける唯一の職員。2023年4月、民間パートナーとともに(株)南康生家守舎を立ち上げ、QURUWA戦略を民間の立場でも推進。

入江智子 | いりえ・ともこ | 2 | 株式会社コーミン代表取締役 | 1976年生まれ。京都工芸繊維大学卒業後、大阪府大東市に入庁。在職中にネオ三セクであるコーミンを立ち上げ、駅前道路空間を活用した「大東ズンチャッチャ夜市」をはじめる。公民連携エージェント方式で市営住宅の建て替えを行なった「morineki」が2021年春にオープン、2022年「都市景観大賞」国土交通大臣賞他受賞多数。

1

2

受講生が自らの公民連携事業推進のために、行政・民間双方が必要なノウハウを学ぶ場として、2015年に開講された公民連携プロフェッショナルスクール。現在は都市経営プロフェッショナルスクール「公民連携事業課程」として全国の公民連携事業の実践者を輩出し続けている。創設初期の卒業生であり、まちづくりをリードするふたりの卒業生に、スクールの意義をうかがった。

◎「公民連携プロフェッショナルスクール（以下、プロスクール）」を受講した経緯について教えてください。

● **中川** | 私は愛知県岡崎市の土木技師として、入庁以来10年間、上水道管の維持管理、河川の計画・工事・維持管理を担当してきました。平成25（2013）年に「QURUWA戦略」[*1][図1]を立ち上げることとなる前身の部署に異動しました。そして国土交通大学校[*2]の都市行政研修にも参加して全国的な公民連携まちづくりの片鱗に触れ、こんな面白いジャンルがあるのか、と驚くとともに、自治体職員の意識や行動が変わっていかないと、今後のまちづくりは難しいことを痛感しました。その後、アフタヌーンソサエティ清水義次氏が「リノベーションまちづくり@岡崎」に関わっていただいていたことから、プロスクールの存在を知り、ぜひとも参加したいと思いを募らせていたところ、上司の後押しもあり受講することができました。時期としては2017年の公民連携プロフェッショナルスクールの第3期にあたります。

● **入江** | 私は2016年の第2期に受講しました。当時は大阪府大東市の職員として、岩手県紫波町のまちづくり会社で公民連携事業の研修を受ける「オガール暖簾分け」に参加していた時期でもありました。プロスクールは、オガールには大東市から公費で行かせてもらえるのだから自分でも基本的な部分は勉強しよう……と、自己負担で受講した次第です。

スクールから生まれる人と人のつながり

◎ プロスクールの受講内容と、講座を通してどのような学びがあったか、お話いただけますか。

● **中川** | プロスクールのプログラムについては、大きく2点あります。1つ目はeラーニングとして動画講義の視聴や課題図書を読み、毎週レポートを提出し必要な知識をインプット&アウトプットします。平日は仕事があるので、レポートは主に土日にこなすなどとてもタフなスケジュールでした。おかげさまで、本業の処理スピード上がりましたね（笑）。2つ目は、集合研修として合計3回、受講生とコーチ陣が一堂に会して、2～3日の合宿を行います。自身が取り組みたい、取り組んでいる事業をコーチ陣にプレゼンテーションしてアドバイスを受けます。さらに全国に散らばっている受講生同士がお互いどこで何をやっているかを知るとともに、アドバイスし合ったりしました。スクール終了後もOBOGとして関わり続けることはできるのですが、継続して関わる人は全体の1～2割くらいでしょうか。私はそれまでの専門がまちづくりではなかったこともあり、都市経営に必要な行政内部の見るべき情報、例えば市の財政に関わる必要な数字、その他公共施設等総合管理計画の重要性、建築物の断熱化など、包括的に要点を押さえて学ぶことができたと思っています。またスクールのコーチ陣や修了生同士のネットワークも個人的な財産になっています。修了生が全国的な先進事例を実践している人たちばかりなので、まちづくりの最新の情報や人脈に最短距離でアクセスできることは、現在QURUWA戦略を動かすうえで大いに役立っています。

● **入江** | 中川さんがおっしゃったように、ハードな社会人大学といった印象でしたね。私としては、木下斉さんをはじめとする講師陣から、いかにして自分の計画に出資や融資をしてもらうか、どのような人に向けていくらで売るかというマーケティングの考え方を教わったことが大きかったです。ネットワークについては現在、それほど拠るところはないのですが、同じマインドをもっている人とは話が通じやすい、ということは言えますよね。実際に大東市は継続して職員を送り込んでいるので、民間側となった今は、行政のなかにまちづくりに関して共通言語をもつ人材がいるのは頼もしいです。

魅力あるまちづくりが収益を生む

◎ 受講プログラムの一環である、自身のプロジェクトのプレゼンテーションは、実践的ですね。

● **中川** | 今までいちばん恐ろしい場所でのプレゼンでした（笑）。事業に対する仮説がないとコーチ陣もアドバイスできないため、仮説を立てるスキルが磨かれました。例えば、こういうことをすると収益も得られるメリットがあり、まちにとってもよい……と未来の景色を私たちから民間に示すことができれば、民間の方が具体的なアクションを起こしたくなる説得力も増すものです。行政内だけで考えていると煮詰まってアイデアが生まれないことが多々ありますが、民間と交わることで、アイデアの幅も広がります。そこで重要なのが民間との距離感です。公務員には倫理規定があり、「癒着」と言われるような民間との関係になってはいけません。そういったものが作用し、公務員の個人としての特性や属人的なキャラクターを抑えてしまう傾向にあると思います。その一線を超えずに、どこまで民間の方々と深い対話ができるか。こうした距離感の取り方も、スクールでほかの自治体の方の体験談を教えてもらい、実践するなかで掴めるようになりました。もちろん人事課にも事前に相談するよう、細心の注意を払っています。

● **入江** | 私は「地域健康プロフェッショナルスクール」を提案し、現在も会社の看板プロジェクトとして取り組んでいます

図2｜「地域健康プロフェッショナルスクール」の様子（提供：入江智子）

[図2]。例えば、大東市では理学療法士が考案した体操を行う「通いの場」を通して市民同士が健康づくりを行うことで、介護予防給付費が抑制されています。通いの場は大規模なものをひとつ設置するよりも、地域の中に小さな拠点をたくさん設けることが有効で、個人住宅もそのような場になり得ます。取り組みを実行するためには、自治体の職員が地域の資源を介護保険制度に組み込むことや、市民に問題意識をもたせることが必要で、それらをスクールの形式で学んでいただいています。

◎ 市民が行政からのサービスを一方的に待つのではなく、市民同士の力が発揮される小さな場を見出し、制度やスキームを通じてオフィシャルな「場」にしていく。UDCOのスクールにも、共通する部分があるように感じます。

● **入江** | 私にとってプロスクールは、具体的なまちづくりのメソッドを教わるというより、公共サービスの質を高めて魅力のあるまちづくりを行い、税収の増にもつなげる「イズム」に触れる場でした。例えば公民連携というと建築や土木を思い浮かべがちですが、必ずしも箱物を整備するだけが術ではなく、福祉という方法があってもいい。さらに言えば、公民の「民」は、従来は民間企業が対象でしたが、この地域健康スクール

図1｜QURUWAのシンボル籠田公園の日常（提供：中川健太）

の場合、「民」は企業ではなく市民です。これからの行政は、民間企業と市民、そのどちらとも組まなければなりません。プロスクールは、そんな発想に至るきっかけにもなりました。

◎ 入江さんの実践[図3]は、まちづくりにおけるスクールの可能性を示しているように思います。

スクールが まちを耕し人を育てる

◎ 岡崎市のQURUWA戦略でも、企業を対象とした自業リノベーションスクールを開催されていますね[図4]。

● **中川**｜リノベーションスクールでは、「実践の場なので、学ぶだけで終わるなら参加しないでください」と呼びかけるように努めています。意外と民間(企業)の方ってまちを見ていないんですよね。そこをいかに、まちと関わると面白いことが起きるか、事業の可能性が広がるかというマインドに変えていけるよう営業しています。そこから行動変容につながって、中長期的にまちに関わるプレイヤーを増やしていくことが重要です。その時に効くのが、先ほど申し上げた「仮説」なのですね。また、プロスクールの講師陣の清水義次さんが「敷地に価値なし、エリアに価値あり」とおっしゃるように、エリアを意識して事業を実施するようになると、まちへの関わり方や事業の発展性が変わってくるんです。結果的に収益性もアップします。多様な人が関わってくると、もっとまちは面白くなる。こんなことを、今、ひしひしと実感しています。

◎ 中川さんも公務員であると同時に個人として、まちづくりを楽しんでいらっしゃる印象を受けます。

図4｜事業リノベーションスクール(企業版リノベーションスクール)の参加企業17社のみなさま(提供：中川健太)

● **入江**｜スクールでは、生き方から考え直せ、と言われている人もいますよね(笑)。民間サイドだけでなく、行政でもまちを見ていない人は大勢いるものですが、やはり職場で仕事をして家に寝に帰るだけでは、まちづくりってできないと思うんです。自分はどんな人間で、どうまちに関わっていきたいか——。まずはそこに気づけたら、成長ができるのではないでしょうか。

◎ スクールが、プレイヤーとなり得る芽を秘めた人の数を増やし、まちに継続的に関われる環境を提供する。おふたりのお話をうかがって、こうしたこともスクールの役割のひとつだとあらためて気づかされました。今日はありがとうございました。

［文＝植林麻衣］

*1——乙川リバーフロント地区内の豊富な公共空間を活用した公民連携プロジェクトを実施することにより、エリアの回遊性を高め、まちの活性化(暮らしの質の向上・エリアの価値向上)を図る戦略(https://www.city.okazaki.lg.jp/1100/1184/1176/p022685.html)

*2——国土交通大学校は、国土交通省の総合的な研修機関として、国土交通省の職員や国土交通行政に携わる地方公共団体・独立行政法人の方々を対象にした人材育成プログラム(https://www.col.mlit.go.jp/over view.html)

図3｜入江さんが主宰する「株式会社コーミン」が手がけるまちづくりプロジェクト「morinek」(提供：入江智子)

［インタビュー］民のパブリックマインドの醸成がまちを動かす

——まちづくりキャンプ

話者

大我さやか｜株式会社Open A 大阪オフィス シニアマネージャー

荒木牧人｜株式会社80%代表取締役 maao代表

聞き手

伊藤孝仁＋高橋卓｜UDCOデザイン コーディネーター

大我さやか｜おおが・さやか｜1｜Open A 大阪オフィス／シニアマネージャー｜1986年長野県伊那市生まれ。2008年京都工芸繊維大学デザイン経営工学科卒業。2010年首都大学東京大学院修了。2010年Open Aに入社。2011年「団地R不動産」を立ち上げ、全国の団地再生に携わる。2014年大阪市大正区のエリアリノベーションが始動。2015年まちづくりキャンプなど、大正のリノベーションプロジェクトに多数かかわり、2018年大阪市に移住。全国各地を飛び回るノマドワーカー。

荒木牧人｜あらき・まきと｜2｜株式会社80%代表取締役、maao代表｜1974年埼玉県ふじみ野市生まれ。1997年東京理科大学工学部第二部建築学科卒業後、建設会社、設計事務所勤務を経て、2013年荒木牧人建築設計事務所(現：maao)設立。同時期にリノベーションスクール・プロフェッショナルコースに入学。体系的にリノベーションを学び、川越で実践開始。2016年「第1回まちづくりキャンプ」参加後、異業種仲間4名で株式会社80%設立。「すずのや」「glin coffee 大工町店」を皮切りに、多様な場の企画から運営をDIY中心に行う。一級建築士。こども好きな4児の父。

空き店舗や空き家のリノベーションなどを通じて、魅力あるまちの将来像を描くワークプログラム「まちづくりキャンプ」。まちに眠る「空間」と「コンテンツ」の再発見を掲げるスクールが示唆するまちづくりについて、講師と受講経験者のふたりに語っていただいた。

まちの魅力を発見し、リノベーションで可視化する

◎ まずは企画運営や講師として「まちづくりキャンプ」に携わる大我さんから、プログラムの内容について紹介いただけますでしょうか。

● **大我**｜「まちづくりキャンプ」はエリアリノベーションの取り組みとして、まちの魅力とプレイヤーを発掘することを目的に立ち上げられたプログラムです。第1回(2015年)は行政から人口減少を食い止めたいとOpen Aに相談を受けていた、大阪市・大正区の商店街で行いました。大阪市の南西部、港湾に面する大正区は、周囲を運河に囲まれ、明治時代以降は阪神工業地帯の工業集積地として大阪経済を支えていました。働き口を求めて沖縄県からの移住者が多いのも特徴で、「リトル沖縄」と呼ばれるエリアもあります。2015年当時は工業の衰退や顕著な少子高齢化により消滅可能性都市と危惧されている、という状況でした。「まちづくりキャンプ」では、まちやリノベーション事業に関心のある受講生をターゲットに、「商店街再生戦略コース」「小さなカフェプランニングコース」「リノベーションプランニングコース」「本気のセルフリノベコース」の4つのプログラムを対象に、3日間の短期合宿のようなかたちで行いました。区内外から老若男女、約50名が参加しました。受講生は、コースごとに分かれ、まち歩きでエリアの歴史や特性を把握したり、その特徴を生かすエリアの方向性やコンセプトを考えたり、具体的な物件をモデルにリノベーション事業を組み立てたり、さらには空き店舗をDIYでコミュニティスペースに

図1｜空き家をシェアサイクルの拠点にリノベーションする提案(提供：Open A)

図2｜株式会社80%で手がけた「旧大工町長1」（提供：荒木牧人）

生まれ変わらせたりするなど、濃密な3日間を過ごしました。エリアリノベーションに携わる不動産、都市計画、建築設計、工事、飲食の関西のトップランナーが講師を務め、レクチャーやファシリテーションをしながら、ときには受講生に喝を入れながら、事業をブラッシュアップし、最終日には事業プランを、モデル物件を提供してくださった不動産オーナーにプレゼンテーションするという取り組みを行いました[図1]。

◎ その後「まちづくりキャンプ」は各地で展開されることとなりますが、第1回目を振り返った手応えはいかがでしたか。

● **大我**｜受講は有料だったのですが、予想以上の人が集まってくれて、まちづくりに対する関心の高さがうかがえました。ただやはり地元のオーナーさんが一緒に盛り上がってくださらないと事業に結びつかない。日常的に信頼関係を築いていかないと難しいことを実感しました。ともあれ大正区での開催は、空き家のオーナーや不動産業者、さまざまなプレイヤーたちのつながりをつくるきっかけにもなり、その後に区内での長屋をリノベーションしたホステルや、シェアアトリエ付き住宅など、エリアの魅力につながる新しいリノベーション事業につながっていきました。

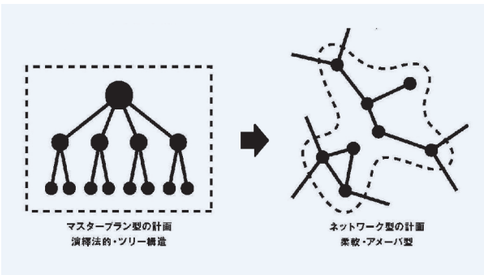


図3｜計画の構造変化（提供：Open A）

スクールでの出会いを通じて、まちを応援する会社を設立

◎ 次は川越の「まちづくりキャンプ」について、荒木さんから受講の経緯などをお話いただけますか。

● **荒木**｜もともとリノベーションに興味があったのですが、いざ地元・川越で何ができるか考えたとき、どう進めてよいのか悩んでいました。折しも川越市でもエリアリノベーションによるまちづくりに取り組み出した時期で、まち歩きやシンポジウムが市の主催で催されるようになり、「まちづくりキャンプin川越（2016年）」の開催も、そのような動きの一環だったと思います。私が受講したきっかけは、以前一目惚れした空き家が「まちづくりキャンプ」で対象物件になっていたことです。迷わず参加を決めました。

◎ 受講内容はどのようなものだったのでしょう。

● **荒木**｜大正区と同様に3日間のプログラムで、観光エリアの裏道のような商店街が対象地でした。川越は歴史がある反面、保守的で、やや内向きなかたちで商売が成立している傾向があります。そこに講師のみなさんが檄を飛ばして、受講者も本気のモードになっていく。厳しいコースでしたが、熱気が立ち込めていました。

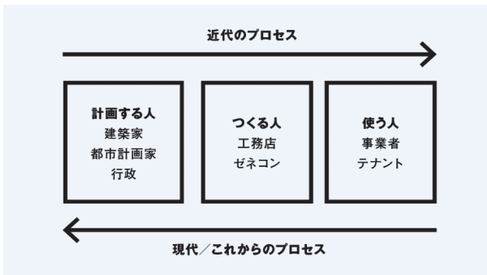


図4｜空間ができるプロセスの逆転（提供：Open A）

◎ 荒木さんはこのときの「まちづくりキャンプ」がきっかけで、「株式会社80%」を設立、さらにまちづくりに深く関わるようになられましたね。

● **荒木**｜「株式会社80%」はリノベーションでまちをよくしていくことを掲げた民間会社で、「まちづくりキャンプ」で出会った同世代の4名で立ち上げました。めいめいが会社を運営しており、不動産、飲食業、リノベーション、設計と業界も異なるのですが、得意分野を活かして協働しています。そして勝ち組・負け組と白黒つけるのではなく、ちょっと力を抜いてまちを楽しくできないか、と「80%」という名前を冠しました[図2]。

アメーバ型まちづくりを生むスクール

◎「まちづくりキャンプ」は、プレイヤーたちをつなげ、まちに新しい風を生み出す土壌にもなっているのですね。スクールがもつ可能性を実感します。

● **大我**｜これまでのまちづくりは、行政がマスタープランを計画し、帰納法・ツリー構造的にプロジェクトを動かそうとしていた感があります。アンケートや交通量など数多あるまちのデータを分析し、先行事例に習い、こういうまちづくりをすれば誰もNOと言わないであろうという一般論に陥りがちです。しかし本来のまちの成り立ちは、地域の暮らしや生業から自然発生的に生まれて広がっていくネットワーク型・アメーバ型であったと思うのですね[図3]。荒木さんが取り組まれている川越はまさしくネットワーク型の典型ですね。

そして従前の、行政や計画者から施工者、そして使う人へというトップダウン的な構造も転換する時期を迎えています。人口減少、少子高齢化、AI・ドローンなどの技術進歩、社会情勢などの変化が大きく、十数年も実行までにかかる計画が社会変化についていけない時代になりました。これからは計画する側もつくる側も使う側も、皆が当事者となり、マクロな目線をもってまちの価値を持続的に高める動きに変わってきているように思います[図4]。

◎ トップダウン的な段階性を、アメーバ型にしていく構造変化の役割もスクールが担っている印象を受けます。

● **大我**｜予期していないものがどんどん生まれていくのが、アメーバ型のまちづくり。こんなのがいいんじゃないかな?といったアイデアが形になり、まちに波及していく。特定の組織や同じ経歴、学識をもつ人たちだけで動かそうとすると、オリジナリティが弱くなり、均質化を招いてしまいます。アメーバ型はそのエリア独自の個別性を生み出し、さらに融合して共感の連鎖を育み、じわじわと滲むように広がっていく。不動産業や飲食業や宿泊業、製造業といったさまざまな業種が絡み合い連鎖していくほうが、新しい価値観でまちのポテンシャルを発掘できるし、あらゆる立場の人が参加できる。

図5｜荒木さんが講師を務めた「まちづくりキャンプin川越」（提供：荒木牧人）

◎ 人と人との出会いやものの見方など、予定調和では起こり得ないさまざまな出来事が絡み合っていく。スクールもそうした偶然性を創発する場でもあるのですね。

● **荒木**｜世代をまたいで仲よくしていったり、融合していったり。川越の「まちづくりキャンプ」は連帯感が強いのも特徴のひとつだと思います。プログラムではグループを組んで事業プランの作成やプレゼンテーションに取り組むのですが、その枠を超えて皆が協働するのですね。例えば飲食店のリノベに取り組んでいたチームの事業が具現化すると、次はゲストハウスのリノベーション案件を手伝いにいくこともありました。こんなふうにちょっとずつ絆を育んで、まちを愛している人がどのくらいいるか顔が思い浮かべられるようになると素敵ですよね。

● **大我**｜荒木さんは今や、「まちづくりキャンプin川越」の講師もされていますよね[図5]。私も大正区での「まちづくりキャンプ」がきっかけで縁が重なり、最終的には大阪に移住しました。まちづくりに関わるうえでは、まず自分が面白いと思わないと人を巻き込むことができません。「まちづくりキャンプ」も、講師と受講生という関係だけではなく、仲間を見つける場でもあると思っています。一方でスクールについて言えば参加する人の熱量はさまざまで、この地に骨を埋めて事業をやりたい、という人ばかりでも息苦しくなってしまいます。もちろん高い熱量は必要なのですが、荒木さんの「株式会社80%」のように本業をもちながら「80%」で関わるスタンスも魅力的だと思いました。自分の裾野を広げながら、さまざまな熱量の人と関わることが、まちづくりでは大事だと思います。面白い、と感じてもらえれば若い人たちは自然と入ってきてくれる。熱量の高い人がさまざまなレイヤーを把握して、変化をうまく感じ取りながら動かせるとよいですね。

◎ スクールという場も、ある意味、まちの縮図なのですね。アメーバ型まちづくりの視点をスクールに取り入れてみることにも可能性を感じました。今日はありがとうございました。

［文＝植林麻衣］

BACKSTREET(DANCE)PARK

@大栄橋周辺暫定空地

Nakasendo Chrono Market

@大宮門街前歩道部

STREET DESIGN SCHOOL

ストリートデザインスクール

ひととまちが出会い 魅力が育つ 学びの場

- ストリートデザインスクール@大宮 ―― 18
- 社会実験#1｜BACKSTREET (DANCE) PARK ―― 20
- 社会実験#2｜Nakasendo Chrono Market ―― 22

#1

STREET DESIGN SCHOOL SS

ストリートデザインスクール@大宮

実践型プログラムと伴走サポートによる学びの場

都市空間を利活用するためのルールを理解する **ストリート** 各種制度・許可申請 関係者協議・効果検証

地域課題を抽出しまちの価値を可視化する **デザイン** 行政計画・地域課題 企画立案・広報戦略

継続性を意識してプロジェクトを実装する **マネジメント** 出店交渉・事業構築 空間計画・収支計画

スクール3カ年の成果 修了生81名、7つの社会実験

2021年からはじまったストリートデザインスクール(以下、スクール)は今年で3年目となった。多くの都市で、ウォーカブルなまちづくりを目指した公共空間利活用が試みられているなか、協働して「エリアの戦略を組み立てながらまちのビジョンを推進できる」ための担い手不足が共通の課題である。そこで、2017年よりUDCOが取り組む「おおみやストリートテラス」などから得たノウハウをもとに、ストリートを舞台として多様な主体と連携した学びの場としてのスクールを立ち上げた。

昨今リスキリングへの意識の高まりやオンラインツールの普及によってまちづくりスクールが増えつつあるなかで、UDCOではスキルと知識[図1]を身につける3.5カ月間の実践型プログラム「社会実験を前提として、座学と実践を通じて、体系的なまちづくりの知識と方法論を学ぶ」にこだわってきた。3カ年の成果として以下の点が挙げられる。

- 81名の修了生(実践コース・聴講コース)
- 主要回誘動線(p.01)上に7つの社会実験[図2]
- 社会実験ガイドブック第二版(現場レベルの実施内容をまとめたもの)

また、効果としては「実践的ノウハウを得た人材による活動の継続→まちづくりの担い手がネットワーク化→活動の地域定着」が現れている。数カ月間のプログラムを通じてチーム・ビルディング(状況に応じた最適なチームワークの構築)が行われることによって、修了後に協働する仲間ができることが、活動の継続のためにはより重要であることがわかった。

図1 実践を通じて学べる3つのスキルセット

図3 地権者から受講生へ、受講生から主催者へ、立場や役割を変えながら地域とつながるプレイヤーたち

スクール効果による社会実験:

STREET MARKET 2023(pp.26-27)

修了生による主体的な活動:

スクール修了生による
ふたつの社会実験を同日開催

[**社会実験1**]
@大宮門街(再開発ビル)地上階広場:
修了生主催、修了生コーディネート

[**社会実験2**]
@大宮門街(再開発ビル)前面歩道部:
実行委員会主催、UDCOコーディネート、
さいたま市後援

本号の特集企画(スクール・アーバニズム)とともに、3カ年の成果と効果をふりかえりながら、大宮におけるプレイヤー支援と他都市へのスクール展開など今後の展望を考えたい。

ひとが動き、まちを動かす

3年目のスクールを終えたタイミングで、地域に根ざした場で人材が育成されることは、まちにとってどんな意味があるのか考えてみたい。冒頭でふれたように、ストリートデザインのノウハウ普及と人材育成を目的として立ち上げたスクールだったが、修了生による主体的かつ継続的な活動につながったことで、実践型プログラムにはチーム・ビルディングの効果があることがわかった。

また、地域内外から集まった受講生たちが新鮮な視点でまちを駆け巡り、新たなプレイヤーとつながりながら社会実験を実装するプロセスは、地域ポテンシャルの可視化と出店者ネットワークの発掘につながっている。結果として、3年間のスクール継続により、地域関係者たちが互いの領域や立場を越えて交ざりあう状況[図3]を生み出しつつある。その一例としては、「公共空間利活用を知った民有地オーナーが(気づき)→スクール受講生となり(学びへの参画)→ネットワークを活かして主催者へ(自らプレイヤー)」といった、まちのステークホルダーが意識と役割を変えていったケースがある。

この実例から期待できることは、スクールを通じてチームワーク×ポテンシャル×ネットワークが醸成されると、それが都市の活力となり、まちの大きなビジョンにつながっていく、というストリートからエリアにつながる好循環である。地域への持続的な効果を考えるならば、その投資先としては「利活用」ではなく「利活用する人材」が相応しいのではないか。公有地・空地・道路を対象として公益的な活動をつくることは容易ではないが、スクールの定着は、地域の人材が主体的にストリートを利活用しながら、エリアの課題解決にまで応えていく可能性を秘めている。

図2 主要回誘動線(p.01)に実装された7つの社会実験(2021-2023年)

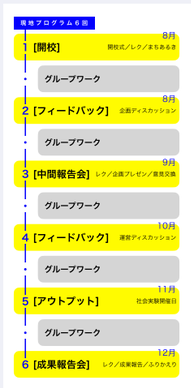


図4 プロジェクト実践コースのプログラム

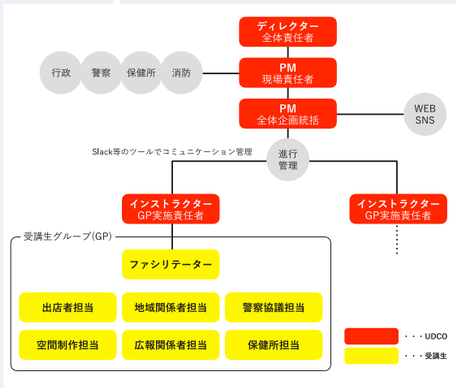


図5 プロジェクト実践コースの伴走体制

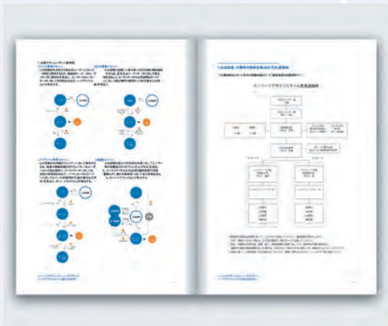


図7 社会実験ガイドブック(社会実験の企画立案から実施計画に関する基本事項が記載)

上・図5 自らも受講生グループの一員として伴走するインストラクター
下・図6 受講生が自らの学びを意味づけられるよう導くディレクター

地域とともに考える学びを次につなげる

実践的ノウハウの習得だけでなく、「受講生同士あるいは地域プレイヤーとの関係構築」それに加えて「受講生が成長を感じられるプログラム[図4]」の企画と運営に注力してきた。具体的には下記3つのポイントがある。

①一緒にやる(インストラクターによる伴走体制)
②地域にひらく(多様な主体との連携/意見交換)
③学びを語り直す(成果報告会でのふりかえり)

1グループ(5-7名)に対して専属のインストラクター(UDCOスタッフ1名)を付け、現地プログラムだけでなく自主的に行われるグループワーク[図5]にも参加することで、一方的な知識伝搬ではなく一緒に考えるジェネレーター(pp.6-9)的役割をもたせている。議論を外側から導くのではなく、自らも一員として発言することでさらなる意見やアイデアが誘発され、運営側としても新たな気づきを得ることができる。古着市やダンスという従来の社会実験にはなかった地域特有のコンテンツが発掘できたのもこのようなプロセスの賜物である。

もうひとつ、現地プログラムの最終日は二部制としており、前半は地域関係者を招待して社会実験の成果報告、後半は受講生とUDCOメンバーだけで内省的に「スクールで学んだこと」を掘り下げていく時間を設けている。

受講生の学びが一人称の言葉になって語られるように問いかけることで、「こんなことができなかった」というネガティブなふりかえりや紋切り型の感想にならない、「実践したあなたにしか言えない言葉」を引き出すことが重要である。このふりかえりの時間によって自らの学びを俯瞰し、次の活動につなげてもらうことが狙いである[図6]。

学びを俯瞰するための問いかけ

- スクールに参加したことで変化した、あなたの視点や考え方を教えてください。
- 最も印象的な瞬間を教えてください。また「なぜそう思ったのか」を教えてください。
- 「私」は何を学び、どのように次につなげるか、そのためには何をすべきかを教えてください。

大宮における深化と他都市に向けた展開

受講生をはじめとした主体的に関わろうとする地域プレイヤーに向けて、社会実験ガイドブック(以下、ガイドブック)[図7]を配布し、まちでの活動を継続して取り組む際の手引きとして活用してもらっている。ガイドブックは、まちづくりに関心のある潜在的なプレイヤーにとってはスキルやリソースを概括的に確認することができ、スクールの立ち上げを検討している他都市においては工程や業務を把握することによって運営イメージをもつことに有用である。UDCOとしては、各プレイヤーや各都市の反応によって状況把握に役立ち、新たな連携先の発掘とスクール事業の展開ニーズを掴むことができる。今後は地域の中間支援組織(全国24のUDCやまちづくり会社)との連携体制も視野に入れ、UDCOの強みを活かした支援を行っていきたい。

- 地域特有の課題をリサーチしながら戦略を立てる
- デザインを通じたイメージづくりで都市空間利活用を推進する
- 効果検証によって行政計画につながる合意形成を図る

例えばこれから公民連携型都市再生に取り組もうとする自治体に対しては、活動主体の組成やリーディングプロジェクトの企画立案を目指した、ストリートデザインの普及を後押しする。一方、大宮では、地域民間企業との連携や受講生OBOGをスクールのインストラクターに迎えることによって、地域経済や人材循環を生むエコシステムの構築を引き続き目指す。このようにスクールを通じてまちづくりを学び合うことで、大宮のまちへ還元するサイクルを実現していきたい。

[高橋卓]

● STREET DESIGN SCHOOL

SS

社会実験 #1 BACKSTREET (DANCE) PARK

集積しつつあるダンススクールに着目し
バックストリートの活性化を図る

人通りの少ない バックストリートで 見つけた光景

この社会実験の会場は線路端にある東日本旅客鉄道株式会社大宮支社(以下、JR東日本)の敷地とその前面道路である。大宮駅東口の賑わいあるエリアにあるのだが、人通りの多い大宮銀座通りからは一本奥に入ったところに位置し、かつ隣接する大栄橋は耐震工事により高架下の店舗がすでに閉店している[図1]。JR東日本の敷地は、元は線路などの鉄道施設を管理する業務施設として利用されていたが、現在は移転したことにより敷地が暫定的に閉鎖されている。そのため前面道路の人通りが少なくなり、路上喫煙が増えるなどといった環境悪化の懸念がある。地元から環境改善を求める声もあり、JR東日本の協力を得てストリートデザインスクールによる社会実験を行うこととなった。

受講生たちはまち歩きのなかで、この表通りから見えにくい立地を秘密基地のようだと魅力的に捉えていた。後日訪れた際に、大栄橋下でダンスを練習する親子の姿を発見し印象に残ったようだ。それを機にダンスに着目することで、大宮周辺にダンススクールが集積しつつあることに気づいた。氷川神社にて祝いごとで舞を踊る大宮古来の習わしがあることも踏まえ、閉鎖していた敷地を利活用する最初の企画として、ダンスが適していると考えた。

協力者を集め 社会実験の 可能性を広げる

初期段階で受講生の友人である振付師に声をかけ、趣旨に賛同いただき参加してもらった。上手(かみて)などの業界用語にはじまり、ステージの設えに90cm刻みのバミリ(舞台上に目印を付けること)が必要であることなどさまざまなアドバイスを受け、当日のMCやワークショップも担当してもらった。地域コミュニティのつながりでDJや音響の協力者も見つかった。JR東日本の担当者とは情報共有だけでなく、現場での立ち合い、安全確認や敷地清掃などでも連携した。

ダンス出演交渉では、可能な限り実際に会って企画の趣旨を説明し、ただ参加するだけではなくまちをつかう担い手となってもらいたいことを伝えた。そこでダンススクール同士での交流が無いことがわかり、パフォーマンスの合間に所属ダンススクールの垣根を超えて楽しめるワークショップを行うアイデアが生まれ、実現した[図2]。受講生たちは3カ月という短期間のなかで協力者を集め、自分たちの可能性を広げることに成功していた[図3]。

バックストリートに 人を引き込む キッズダンサー

ストリートでのダンスが地域貢献に活用されることは時代の変化と言える。一昔前までストリートでのダンスは若者のアンダーグラウンドなカルチャーであり、見方によっては少し近寄りがたい存在であった。現在のダンスは小学校の授業にも取り入れられ、子どもの習いごとや大人のフィットネスとして身近な存在となっている。ダンスカルチャーが一般化する転換期であったため、ダンスがバックストリートのイメージを向上させることができるコンテンツとなった。

今回はキッズダンサーが多く出演してくれた。衣装を身にまとい真剣な表情で踊るキッズダンサーたちによって、空間が生き生きとした場所へと変化した。また、観客として保護者が訪れることは想定していたが、会場はその予想を超えた多くの人で賑わった[図4]。大宮の子育て世帯は都内に通勤する方や、マンション住まいなどで自治体に加入しない例も多く、地域に関わる機会が少ない傾向にある。今回、子どもを通じてまちに関わる機会を設けることの意味に気づかされる面もあった。

図1 | 会場の位置図

図2 | ダンスワークショップ

図3 | 協力者と受講生

図4 | 大人顔負けのパフォーマンスと湧れる観客

華やかなステージと 並行してつくる 日常の風景

敷地の特性を踏まえダンスの文脈を空間に活かした。閉鎖された建物が醸し出す雰囲気を活かすために色数を抑え、ダンスらしさを感じるミラー素材を採用。バミリがダンサーの身体モジュールであると捉え、90cmグリットで上部にミラーバルーン(以下、バルーン)を配置した。大栄橋や仮囲いの外からも確認でき、風に揺れる様子が目に止まりやすく効果的であった。ステージは段差を設けないことで、パフォーマーと観客の距離が近くなりワークショップも参加しやすくなった。バルーンは華やかさを演出するとともに、覗き込んだ人の笑顔や青空を写し込み、狙い以上の楽しさが生まれていた。地元の飲食店3店舗に出店いただき、積み重ねたパレット(物流用に使われる"すの子"状の台)で居場所を設けた[図5]。

企画を進めるなかで、単なるダンスイベントとなっていないかという指摘を受けた。受講生たちはあらためて話し合い、まち歩きで見つけた光景も必要だと考えパフォーマンス前の練習風景を道路につくり出すことにした。そのために前面道路を歩行者専用とするべく、さいたま市に協力をいただき警察と協議をしたうえで交通規制をかけた。結果として当日はステージ上でのパフォーマンスが練習風景として前面道路へ滲み出し、敷地と道路の一体的な利活用となった[図6]。

駅周辺の将来像に つないでいく "( )"に込めた思い

JR東日本の担当者からは「自分たちの発想にない活用案に驚かされた。将来のまちづくりが議論されている場所でもあり、大宮の未来につながっていく取り組みになるとよい」と高評価をもらった。

この場所は「大宮駅グランドセントラルステーション化構想(以下、大宮GCS化構想)」[*1]の中心地「ターミナル街区」[*2]における「開発街区」[*3]の北端に位置している[図1]。この社会実験はミクロなスケールの取り組みではあるが、だからこそ新しいアイデアが採用でき、短期間に実行できたとも言える。今回は(ダンス)によるバックストリートの活性化を実現したが、(アーバンスポーツ)、(音楽)など、ダンス以外にもさまざまに活用を試みることは、この場所の将来像を議論する材料となるだろう。そのような思いから、受講生はダンスに"( )"を付け、コンテンツをダンスに固定していないという意図を表現している。

大宮駅周辺エリアでは、大宮GCS化構想に向けてまちが少しずつ動いていくなかで、暫定空地は今後増えていくことが予想できる。今回のように暫定空地の利活用を試みることで、まちのポテンシャルを発見し、まちづくりへの参加意欲をもつプレイヤーにつないでいくこともできる。大きなまちづくりに向けた、小さな一歩を重ねていき、今後の大宮のまちのあり方について、あらためて地域の皆さまとともに考えていきたい。

[酒井伸子]

*1——大宮駅グランドセントラルステーション化構想(大宮GCS化構想)|大宮駅の駅前広場を中心とした交通基盤整備、駅前広場に隣接する街区のまちづくり、乗換改善等を含めた駅機能のさらなる高度化を三位一体で推進する取り組み。平成30年7月に策定

*2——ターミナル街区|大宮駅とその周辺街区が一体となり、交通の要衝、街の玄関口としての機能強化を図る大宮駅および大宮駅前のゾーン

*3——開発街区|ターミナル街区のうち、まちづくりの検討が進められている地区。現状、東口側の4地区を指している。大宮の個性とした路地の雰囲気が感じられる開発を検討している

図5 | 90cmグリット配置のミラーバルーンとパレットによる滞在空間

図6 | 交通規制をした道路での練習風景

● STREET DESIGN SCHOOL 2023 SS

社会実験 #2 Nakasendo Chrono Market

まちの時間を
ひと・ものから知るマーケット

蔵からはじまるマーケット

大門2丁目の大宮門街前面歩道部にて、2023年11月23日にストリートデザインスクールの受講生による社会実験として「Nakasendo Chrono Market」[*1]と名付けた蚤の市を実施した[図1]。「Nakasendo Chrono Market」とは、かつて宿場町として栄えた鴻巣や浦和などで開催するひな市や骨董市に着目し、中山道を歴史ある市(マーケット)文化が育まれるストリートと捉え、広域的な文化醸成やネットワーク構築を目指す取り組みである。

きっかけとなったのが、まち歩きのなかで見つけた大宮製油の蔵であった[図2]。大宮で確認できる唯一の蔵であり、受講生にとって隣接する再開発ビルと相まって魅力的な存在に映った。そこで、店主の逸見裕一・駿介さんに話をうかがうと、店舗の歴史を教えていただき、かつ蔵にある小物や店内に置かれていた古道具や大宮の古地図などを拝見させてもらった。どれもが個性的で雰囲気のある品々であり、再開発による都市更新が進み、かつて宿場町であったまちの歴史や個性という側面が見えづらくなる大宮では貴重な存在であった。また、その品々がもつ背景や思い出から、人やまちを知ることにつながると考え、古物による市(マーケット)を中山道に面する歩道空間を舞台として実施することにした。

誰もが参加できる

「Nakasendo Chrono Market」の特徴のひとつとして骨董店などの専門事業者以外でも参加できることだ。再開発ビルの地権者や、飲食店の店主、受講生の親族も趣旨に賛同し、骨董店や古道具店を加え、10の出店者が参加した。年齢や職業もばらばらで、蚤の市に初参加から常連の出店者まで幅広く、食器やアクセサリーのような小物、懐かしのレコード、椅子や箪笥などの家具まで、それぞれの出店者の個性溢れる出品物が並んだ。出店に際しては商品の背景や思い出を記したパネルを設置し、来場者との会話のきっかけづくりとなる工夫を設けた。

また、歩道空間をゆったり滞在できる場とすることでコミュニケーションが多く生まれるように、軽食や珈琲提供をする地元店舗とキッチンカーによる飲食スペース、ソファなどを設置する休憩スペース、大宮製油から拝借した大宮の戦前、戦後などの古地図を設置する展示スペースを設けた[図3]。来場者が興味を抱くことで、次回の参加者となりえる。そのような地域の賑わいを育む循環を目指した。

図2 大宮製油の蔵

○と△の下に生まれる風景

受講生は各地の蚤の市などのマーケットに足を運び、リサーチを行った。そこで全体の統一感をつくりながらも出店者の個性を引き出すことが重要だと考え、3m角の出店区画に、1辺3mの三角タープと陳列用カウンター、そして丸型の店舗サインを共通のデザインとし、区画内は出店者が自由にレイアウトを行えるようにした。

当日は歩道部で実施中のストリートプランツのプランターを必要に応じて最小限移設し、プランターに取り付けられる農業用のスチールパイプと三角タープを固定することで、植物に囲まれる出店区画をつくった。また、門街広場側[*2]からの動線も考慮し、陳列用カウンターを道路側だけに向けて配置するのではなく、広場側にも賑わいが感じられるように角度を振りながら配置した。

三角タープに装飾を施す、ストリートプランツのベンチを活かして小物を置く、路上に家具や棚などを並べるなど、出店者それぞれが工夫を凝らすことで、三角タープと円形日除けの特徴的な屋根面の下に植物と古物が混じりあう風景が生まれ、通りゆく方がふと足を止め、立ち寄る姿が見られた[図4]。

図4 ○と△の屋根面

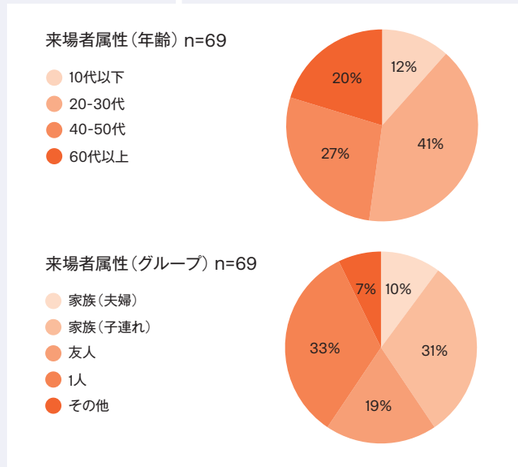


図5 来場者属性

図6 さまざまな来場者が楽しむ様子

椅子も売れるストリートの可能性

定点カメラをもとに社会実験当日の測定をしたところ、翌11月25日の土曜日と比較して約660人、35%の人流の増加が確認できた(両日とも12:00-14:00晴天)。来場者の世代や構成を見ると[図5]、高齢者から若者まで、また家族連れから単身者まで幅広い層が来場したことがわかった。懐かしのおもちゃを手に取るベビーカーを押す家族連れや、装飾品を試着する年配の女性の姿は印象的であった[図6]。特に驚いたのは椅子や箪笥を購入し、両手に抱えたり、肩に担いで持ち帰る人々がいたことだ。高額な商品や運搬が困難な商品は配送手続きや支払方法の点から販売は難しいと思われたが、これらの姿は取り組みの可能性を広げると同時に、ストリートのポテンシャルを再確認することとなった。

終始賑わいを見せ、当日の売上は合計約50万円となり、出店者によっては14万円近く売り上げた。来場者へのアンケートから、人と物との出会いがあった、出店者の実店舗への興味が沸いたなどの回答があり、出店者からは出店者同士の交流や継続的な実施を望む声が上がった。

まちづくりの担い手を育むため

継続的な実施に向けてはまちづくりの担い手を育んでいくことが必要である。社会実験を経て、そのための改善点や検討事項がわかった。

1つ目は、住民の新規出店者を見つけることである。担い手をみつけるために、まず取り組みの認知向上をさらに図る必要がある。また、より出店しやすいように、例えばキャリーバッグひとつで出店可能な規模や方法など、気軽に出店可能な方法を検討したい。2つ目は、ストリートプランツの実施期間外での空間の設えである。三角タープの下に並ぶ古物は印象的であり、今後もタープを活用することが望ましい。そのためストリートプランツを頼りにしない三角タープの支持方法が必要である。設営の手間などを考慮しながら、既製品のテントなどと組み合わせた設えを考えていきたい。3つ目は、次回以降の実施チームの体制づくりである。成果報告会の場で、受講生自らが継続的に実施したいと声を上げた。彼らを中心としたチームでスタートし、段階的に興味のある地域住民や出店者を徐々に巻き込み実行委員会へと移行していくプロセスを目指したい。

これまでマーケットは出店者=事業者、来場者=住民という関係性が一般的であったが、出店者の可能性を広げることで、オープンスペースの活用の促進を図ることにつながる。今後周辺再開発事業とともに、まちのオープンスペースがますます増えていくなかで、この取り組みをきっかけにまちづくりの担い手を育んでいきたい。

[森元気]

*1 Chrono:ギリシア語の「時間」を意味する
*2 大宮門街の中央部にある広場。旧中仙道側などからも通路がつながり、一定数の通行量がある

図1 当日の様子

図3 古地図を眺めながら会話をする来場者

STREET TERRACE

ストリートテラス

ひととまちの出会いを生む ストリート利活用の実践

- ストリートマーケット 26
- ストリートプランツ 28
- ストリートランチ 30
- ポップアップ 32

#2

STREET TERRACE

STREET MARKET

ストリートマーケット

仕組みの定着に向けた地域プレイヤー活躍の場

これまでのUDCOの取り組みで出会った街路文化・地域産業・地元店舗が集結し、大宮門街前の歩道空間を利活用して開催したSTREET MARKET 2023（以下、マーケット）。地域プレイヤーが主体的に企画・運営に関わる社会実験であり、ワードローブ（古着）・プランツ（植木）・フード（飲食）などのコンテンツが集結することで、大宮の魅力をストリートに表現しながら、大きな賑わいを生み出した。各コンテンツのコーディネーターには、STREET PLANTS PROJECT（詳しくはpp.28-29｜以下、プランツ）でのコラボレーターやSTREET DESIGN SCHOOL（詳しくはpp.18-23｜以下、スクール）修了生が多数活躍し、2017年以来取り組んできた「ストリート・インキュベーション」の成果を感じられる1日となった。

また、大宮門街（施設1階門街広場）ではOMIYA DAIMON MARKET（以下、ODM）が同日開催。ODM主催者は大宮門街の個人権利者であり、自身も2022年度にスクールを修了しており、そこで学んだ社会実験ノウハウを生かして広場活用を実践している地域プレイヤーのひとりである。

マーケットでは実行委員会のメンバーとして、ODMでは主催者と企画運営メンバーとして、スクール修了生が再開発ビルの公有地と民有地の垣根を越えて活躍することで、大宮門街周辺の街路沿道一体利活用を実現し、総勢40組の出店者が大宮門街からストリートを彩る、これまでにない規模のマーケットとなった［図1］。

民有地と公有地の同日開催マーケット

STREET MARKET 2023

- 場所：公有地（大宮門街前歩道部）
- 主催：ストリートマーケット実行委員会
- 企画進行：アーバンデザインセンター大宮
- コーディネート：
  - ・フード＝アーバンデザインセンター大宮
  - ・プランツ＝WOODSMART
  - ・ワードローブ＝ストリートワードローブ部会（スクール修了生有志）
- 後援：さいたま市

OMIYA DAIMON MARKET

- 場所：民有地（大宮門街施設1階広場）
- 主催：（株）大成総合不動産
- 後援：大宮門街EAST/WEST
- 企画進行：OMIYA DAIMON運営事務局（スクール修了生有志）

担い手が活躍できる実践現場の提供と支援

UDCOでは、大宮駅周辺地域戦略ビジョンの推進に向けて提言や実践を進める行動計画（UDCOアクションプラン、詳しくはpp.44-45）に従い、まちの動向を見据えながら3カ年ごと（初動期→展開期→波及期）に活動内容を移行してきた。2023年は波及期の初年度にあたり、目的である「仕組みの定着による持続的なビジョンの推進」の具体的な活動のひとつがマーケットである。

ストリートをはじめとした公共空間における社会実験を通じて、空間的な実践ノウハウを経験したプレイヤーが育ち、人がまちを動かす原動力となって、地域に根ざした活動が仕組みの定着と継続を可能とする。そして、担い手のマインド／スキル／ネットワークが育まれることで地域文化の醸成につながるという、ストリートを中心とした運動による地域のエコシステムを「ストリート・インキュベーション（詳しくは『UDCO REPORT 2022』参照）」と定義して、UDCOの活動指針としている。そのなかでマーケットは、ストリートインキュベーションの実践現場として「担い手が活躍できる場所とプロジェクトを提供する」ための取り組みとして位置付けている。

ひらかれた活動とするべく、運営体制としては実行委員会形式（UDCOをはじめとして、地域の植木産業事業者や飲食事業者、そしてスクール修了生が人的資源を出し合い組成、その実行委員会が主催者となって運営する形式）を採用している。各主体が企画段階から協働することによって、柔軟かつ積極的な運営が可能になり、単独では実現できない相乗効果が期待される。

主催者を実行委員会としながら、コンテンツごと（ワードローブ・プランツ・フード）にコーディネーターを配置したことで、出店調整と会場設営を個別管理できるようにした。それにより、搬出入とゾーニングの擦り合わせなどの必要十分な合意形成を図りながら、出店者数が増えたとしても情報共有コストを抑えることができ、運営側の負担を軽減することを実現した。

担い手の活躍の場として今後も継続していくためには、大宮門街前歩道空間の取り組みが認知と信用を積み重ねていく必要がある。実際に、地域事業者との出店交渉のなかで「社会実験の知名度と集客力は大きく関係する」という意見を聞く。そのために実施した具体的な施策は以下の通りである。

- おおみやストリートテラス（2017年）からのブランディング→同デザイナーの起用、トーンアンドマナーの継続使用
- UDCOメディアによる広報マネジメント→UDCO公式WEB／SNSから一次情報の集約と発信
- 会場空間のデザインコーディネート→キーカラーを什器に展開、会場サインの統一

コンテンツを掛け合せ人と人をかき混ぜる

ワードローブ・プランツ・フードの3つのコンテンツが集結することで、マーケットは合計17出店者（ODMとあわせると40出店者）となり、大宮の魅力をストリートに表現しながら、これまでにない規模の賑わいをストリートに創出することができた。

また、コンテンツの組み合わせが多様な世代を呼び込むことになり、来場者数だけでなく客層にも変化があった。古着と植木を組み合わせたことによって、年配の来場者からは「服とプランツの色合いが綺麗ね。道路でこんなことができるのね」という声をもらい、若者からは「古着が宝探しみたいに楽しいので30分以上（ここに）います」との声があるなど、ストリートに対しての印象に影響を与え、かつ滞在時間の増加に効果があった［図2］。

また、出店者にもノウハウの蓄積や業種を超えたプレイヤー同士のつながりが生まれ、マーケット常連の出店者が値札の付け方をアドバイスするなどの出店者同士のコミュニケーションや、マーケットにあわせてセールを仕掛けたり、道路という場所を逆手に取って靴をメインで販売したりと、戦略を立てて臨む出店者が現れた。ノウハウが更新され共有されていく様子に、継続による定着の兆しを感じている［図3］。

裏をつくらず人溜まりをつくるストリートデザイン

プランツの既設什器を活用したことで、植栽で会場の統一感をもたせながら、準備撤収を簡略化することができた。出店者からは「次回もプランツがあるならマーケットに出店したい」という声が多数あったことから、「プランツという数カ月間のプロジェクトを走らせながら、マーケットという1日単位の活動を重ねていく」という大宮の魅力（＝コンテンツ）を掛け合わせるストリートの可能性を実感することができた。

また、商業ビル前の歩道部に17の出店ブースをレイアウトするにあたって、視覚障害者誘導用ブロック（以下、点字ブロック）が歩道部中央にあるため、点字ブロックと敷地境界からの離角距離を確保すると細長い線状の出店エリアとなる。その限定された範囲のなかで、ストリート（歩道部）から商業ビル（広場）へと賑わいをつなげるために、いかに会場レイアウトに裏をつくらないかがテーマとなった。

まず動線は、可能な限り点字ブロックに寄せ歩道部中央としたことで、通行者動線を出店エリアの両側とした。出店者のバックヤードはなくなるが、共通の収納バックを配布することで手荷物を隠しながら路上に直置きできるようになり、景観向上にも効果があっただけでなく、敷地境界から離れることで民地側店舗の視認性を下げることも避けられた。さらに、家具をストリートに対して角度をつけて配置することで人の溜まりをつくるなどの工夫も施した。同種のコンテンツが3店舗以上並ぶことで滞留を促すこともわかった。

仕組みと担い手を地域につなぎとめる

UDCOがストリートに実装してきたコンテンツを、地域主体の取り組みに移行するべく、マーケットの運営体制の構築プロセスから手がかりを得たい。街路・公共空間利活用を目指す取り組みが恒常化するためには、仕組みとネットワークが地域に定着することが重要と考え、それらをつなぎとめるためには主体的にまちに関わろうとする人材が不可欠である。地域からコーディネーター（地域の事業と公益性をつなぎ取り組みを推進する役割）が育ち、運営体制に参画していくエコシステムを形成するべく、参加機会創出→人材育成→公共空間利活用の3層［図4］を意識した支援を行っている。「参加機会創出」の層ではまちに関わるきっかけづくりを目的としたマチミチミーツ（pp36-37）を用意し、さらに実践ノウハウを学びたい方に向けてスクール（pp.18-23）、「人材育成」の層ではUDCOの取り組みで出会ったスクール修了生や地域事業者をコーディネーターに位置付けている。3層の支援を通じて出会った、主体性・公益性の理念に共感した仲間とともに、公共空間利活用によるまちの活性化を目指していきたい。

大宮を特色づけるコンテンツをストリートに実現するなかで、業種を超えたプレイヤー同士がつながり、一日限りのマーケットが大宮の新たな日常として定着していくために、波及期ならではの支援を目指したい。

［高橋卓］

図1｜公有地と民有地それぞれで、ふたつのマーケットを同日開催

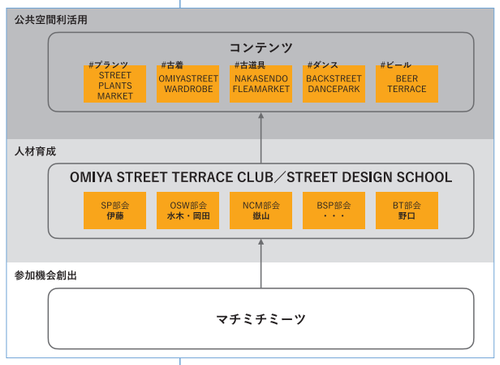


図4｜地域主体の取り組みに移行するための3層のプロセス

上・図2｜コンテンツを組み合わせたことによる多世代の来場者
下・図3｜道路という場所性に着目したシューズなどの販売

● STREET TERRACE

STREET PLANTS PROJECT

ストリートプランツ

グリーンインフラ実装による ウォーカブルの実現

ストリートプランツは、①地域産業の支援、②滞在快適性向上、③維持管理の継続を目的として、収益を生みながら街路や広場に緑化滞在空間を創出するグリーンインフラの取り組みである。2020年度の店舗軒先での10鉢の設置から、2021・2022年度大宮中央通線での実施へ拡張し、2023年度では大宮区役所と山丸公園を含む計約120鉢の実施へと展開した。また、“ウォーカブル”と“グリーンインフラ”の両視点を併せもち、植木生産者・プランツコーディネーター・沿道事業者・大学、そして2022年度に設立した大宮駅周辺グリーンインフラ公民連携プラットフォーム(GIAP)の構成企業の方々との連携体制の下で、大宮駅周辺でのリーディングプロジェクトとして実践を続けている。さらにストリートプランツでは、滞在空間の画像解析による滞在行動や人流測定や緑視率測定による街路景観への効果測定などを行い、次年度の取り組みへの展開を見据えながら実施している。

図2 折れ重なり一体の屋根

デザイン/メンテナンスの実験と改良

2023年度は8月21日から11月30日の約3カ月の期間で実施した[図1]。9月末までを中央通りの区間に約90個、大宮区役所と山丸公園に約30個のストリートプランツを設置し、以降はすべてを中央通りに移設し実施した。空間の仕様はこれまでの構成をベースとしながら、実施規模を年々拡大するなかで、仮設的な木製プランターから恒久性の高いGRC(繊維強化コンクリート)製のプランターへと徐々に移行している。昨年度課題となった転倒対策としては、樹高を抑えた樹木選定や、プランターのキャスターを取り外すことで改善し、緊急対応する回数が減少した。また、これまで実施してきたクラウドファンディングに合わせ、大宮門街前面歩道部では大きくふたつのエリアに対して企業協賛を募り、取り組みの趣旨に賛同いただいた地域の企業から協賛を受け、維持管理費などに充当した。

図1 大宮門街前での様子

公園利活用の開拓

大宮では長期間の公園占用による利活用の事例がなく、計画に際してはエリアプラットフォームのメンバーであり、山丸公園の指定管理者でもあるさいたま市公園緑地協会とともに行政との協議を行った。都市公園では子ども連れの利用者が多く、より十分な安全性への配慮が求められるため、4つのストリートプランツの島を連結した大きな正方形平面の構造物とした。また炎天下での設置となるため、日除けはまちラボで製作し、持ち運びやすいように三角形に折りたたむことができるバタフライ形状とした[図2]。設置の際には日除けに勾配を設け農業用パイプで固定することで、場所によって見え方が変化するような設計である。

街路型での配置[図3]は、直線状に分散配置することで幅員を確保しながら滞在行動のきっかけをつくっている一方、山丸公園での広場型での配置[図4]は、円環状に集中配置することで誘目性を高めて、プランツを回遊する、通り抜けるなど「遊ぶ」行動を誘導している。

図3 山丸公園の様子

図4 植物に興味を示す子どもたち

また、まとめて配置することで結果的に水やりなどの管理がしやすくなり、普段公園管理において公園緑地協会と協働しているシルバー人材センターと連携した管理を行うことができた。

実施期間中には、花や果実のなる植物を観察したり、丸型のベンチを楽器のように叩く子どもの姿があり、公園内だからこそのストリートプランツの可能性を垣間見ることができた。

滞留行動の誘発と緑視率の向上

歩行者交通量は調査によると、山丸公園では約2,000人/日であり、夏季日射の強い経路での歩行者交通量が減少したり、休日より平日が増加するなどの傾向はあるものの、大部分は通過交通のため、山丸公園ではストリートプランツによる歩行者交通量の増減への影響は見受けられなかった[図5]。

滞留行動はもっとも多い秋季で、山丸公園は延べ3時間28分/日(平均14分52秒/人)と、昨年調査の大宮門街前延べ8時間48分/日(平均9分15秒/人)と比較して、山丸公園のほうが平均滞在時間が長く、滞在行動の内容は「遊ぶ(プランターをくぐる、周りを回る、ゲームするなど)」という行動が半数以上を占めており、公園・広場型の滞留行動の傾向と捉えることができる[図6]。

昨年の大宮門街前、今年の山丸公園での滞留行動の調査結果を踏まえると、ストリートプランツの設置によって、大宮門街前でのバス待ちや通過移動において身支度(荷物の入替えなど)や待ち合わせ行動の増加、沿道店舗に利用に伴って街路での会話行動の増加、あるいは山丸公園を利用する際に親子で遊ぶ・見守る行動の増加が見受けられており、ストリートプランツは、設置以前よりある行動に対して、「(会話・見守りなど)複数人でのコミュニケーション)」や、「(身支度・待ちあわせなど)立ち止まり行動」を誘発していることがわかる。

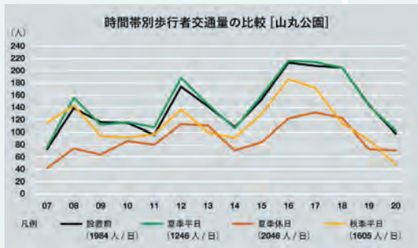


図5 山丸公園の時間帯別歩行者交通量

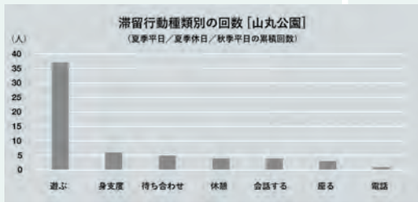


図6 山丸公園での滞留行動

図7 緑視率調査結果

また、緑視率は山丸公園で約12%増加し(近景画角)、大宮門街前(近景画角)の約11%増加と比較すると、街路延伸方向に対して連続的に配置する「街路型」配置と比較して、広い空地に一団として配置する「広場型」配置によって緑視率が向上することがわかる[図7]。一方で、遠景画角については街路樹の影響が大きくなり撮影地点での差が生じやすい。

ストリートプランツは、歩行者通行の結節点となる辻広場や、街路に生じるオープンスペースにおいて、11~12%緑視率を向上させるとともに、複数人でのコミュニケーションや立ち止まり行動といった滞留行動を誘発できることがわかってきた。

GIAP 企業主導の取組開始

GIAP全体の活動としては、ストリートプランツの実施と並行して、「大宮駅周辺グリーンインフラ未来ビジョン|2023」を2023年6月に策定、その実行計画にあたる「アクションプラン」についても議論を深めている。武蔵野銀行をリーダーとするプロジェクト「大宮駅西口グリーンコミュニティ」では、大宮駅西口で働く人を中心にグリーンインフラの理解を深めるワークショップが行われ、ゲーム形式で埼玉県内の実例を学ぶ企画を通じて、企業・商店会の方や学生を含め約40名が西口のまちづくりについて意見を交わした。鐘塚公園の積極的活用や大成線の街路整備、複数の再開発などを控える大宮駅西口での今後の展開が期待される。

[森元気・石黒卓]

STREET TERRACE

ストリートランチ

公共空間の日常的な賑わい創出と飲食事業者の支援

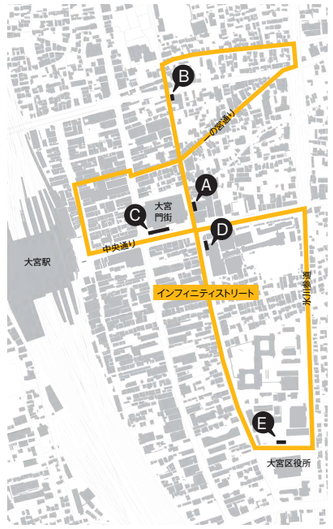


図1 ストリートランチ開催場所

「おおみやストリートテラス」の日常化として、2020年に公共空間の賑わい創出と飲食事業者の支援を目的としてスタート。キッチンカーや地元事業者の飲食販売により、道路予定区域や民間ビルのオープンスペースなどを日常的に利活用する取り組みである。これまでインフィニティストリート沿いで実施してきた[図1,2]。現在は3箇所(A.逸見ビル前、B.宮町二丁目交差点、C.大宮門街前)にて継続的に実施し、ストリートランチの風景が大宮の日常に溶け込みつつある[図3]。

4年間(2024年1月まで)を通して61の事業者により、延べ1,049回もの出店があり、購入者は12,519名にのぼっている。

“コロナ占用特例”から“特例道路占用”へ

コロナ禍が明けまちに人が戻るにつれ、年間売上は2022年の186万円に対し2023年は330万円となった[図4]。場所別に確認すると、住宅街に近いB.宮町二丁目交差点は下がり、駅に近いC.大宮門街前は大幅に上がった。自宅へのテイクアウト利用からオフィスでのランチ利用へ移行したと読み解ける。

道路占用の制度については、C.大宮門街前において“コロナ占用特例”を活用していたが、2023年3月にこの特例が終了することとなった。さいたま市ではこの特例がない状態において、道路上での飲食施設ならびに購買施設は道路交通法の観点から認められていない。そこで同年10月に“特例道路占用”へ変更させて取り組みを継続している。その変更経緯は以下の通りである。

まず1つ目に、都市再生推進法人の指定を受けたUDCOは、“特例道路占用”を使うために必要な“都市再生整備計画”への提案が可能であった。そこでさいたま市担当課と協議し、UDCOが占用主体であるストリートランチの取り組みを追記する提案をした。2つ目に、占用区域の条件「歩行者などが通行可能な幅員3.5m確保」が“コロナ占用特例”と同様であり対応可能であった。そこから道路管理者や交通管理者と都度協議を重ね、キッチンカー3台分が停車できる範囲にて占用区域を設定した[図5]。3つ目に、占用期間は5年以内で設定できるので、2028年までとした。再度申請して占用許可を更新すれば継続して占用することができるため、引き続きストリートランチを実施していくことが可能となった。

図3 大宮門街前の日常風景

地域連携拠点のニーズ把握につなげる

山丸公園ではストリートプランツプロジェクト(pp.28-29)実施に合わせて、公園管理者であるさいたま市公園緑地協会と共催で、2023年9月に期間限定でストリートランチを実施した[図6]。ここは地域連携拠点として将来の活用が検討されている場所である。ストリートランチ利用者に話を聞いて、場所特性によるキッチンカーへのニーズを確認した。代表的な意見は次の通りである。

- 周辺に飲食店が少ないのでキッチンカー出店は嬉しい。
- リモートワーク中なので日常に変化を感じられてよい。
- 子ども用にちょっとした500円以下のメニューも欲しい。

開催した9月の平均売上で見ると、猛暑の影響で売上が伸びない側面もあり、E.山丸公園7,992円、C.大宮門街前9,880円と場所による差はあまりなかった。季節がよければ公園内は飲食しやすい空間であり、屋外での楽しげな食事風景が広がる可能性もある。これらの期間限定の試みは、今後の地域連携拠点のあり方についての検討にもつながるとよいのではないだろうか。

記号	場所名	民地/官地	場所説明	期間	販売形態	2021年平均売上	2022年平均売上	2023年平均売上
A	逸見ビル前	民地	民間ビル軒先	2020年6月～	弁当販売	11,408円	-	-
B	宮町二丁目交差点	官地	道路予定区域	2020年6月～	キッチンカー	8,054円	6,508円	5,772円
C	大宮門街前	官地	拡幅した歩道	2022年5月～	キッチンカー	-	8,708円	18,457円
D	旧大宮区役所	官地	区役所敷地内	2021年11月 *期間限定	キッチンカー	23,978円	-	-
E	山丸公園	官地	街区公園	2023年9月 *期間限定	キッチンカー	-	-	7,992円

図2 2023年1月時点

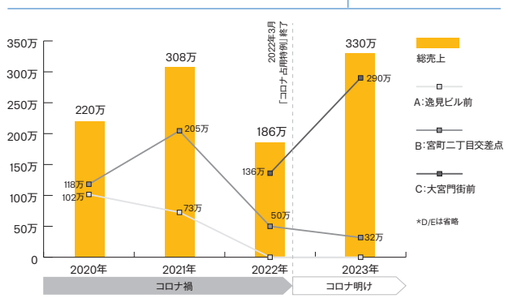


図4 売上推移

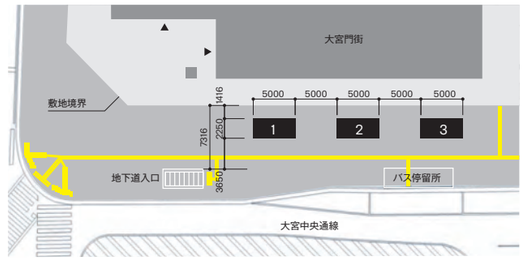


図5 特例道路占用区域

キッチンカーで賑わいをつくるためには

公開空地の商業利用に対する規制緩和が進み、全国的に賑わい創出に向けたキッチンカー活用がブームとなりつつある。その一方、賑わいが不足している場所でキッチンカーが出店可能となるだけでは成り立たない現状があり、最低限の売上が見込める場所に育てる必要がある。キッチンカー事業者へのヒアリングで、大宮では平日2万円程度の売上を求めていることがわかった。現時点ではC.大宮門街前にてあと一歩というところだ[図2]。

UDCOではストリートマーケット(pp.26-27)を開催したり、ストリートプランツ(pp.28-29)を設置するなど別の取り組みも平行して行っている。また大宮門街の民間イベント時にはキッチンカー事業者へ出店を促し、商業施設と歩道部の一体的な活用をしている。これらの積み重ねにより場所への期待値を高め、日常の集客にもつながるように試みている。

日常的な運用のなかでキッチンカー事業者の特性にも配慮している。昨今のキッチンカーブームに合わせ、キッチンカーをマネジメントする会社が出てきたが、事業者に話を聞くと上手く噛み合っていない場合もあるようだ。事業者の一部は決まりきったマネジメント下に置かれることを嫌う傾向や、運営において自由度を求める傾向もある。そこでUDCOでは一定のルールを置きつつも、意見を交換しやすい関係性を築きながら実施している。

自主企画を支援しプラスの循環へ仕掛けていく

前述の通り、C.大宮門街前では場所のポテンシャルに対して売上がまだ届いていない。そこで、ストリートランチのキッチンカーコーディネーターから、認知を高めるために、金曜夜に月一回程度の定期的なイベントをしたいという要望が出た。さいたま市からもC.大宮門街前に対して博多の屋台村のような賑わい風景をつくることに賛同を得ており、「ビアテラス@大宮門街前」が進められている。来年度からの定期開催に向け、まずは2024年3月20日(水祝)にプレイベントを開催する。キッチンカーコーディネーターが出店者を取りまとめ、キッズスペースやサックスの生演奏などのコンテンツも用意する。それを受け、UDCOが空間計画、広報作成、関係各所への許可申請などに対応する。さいたま市は、道路占用・使用協議への協力、市施設や自治会などへの広報依頼に対応するなど、三者が協力し開催に向け動いている。

来年度から始める夜の定期開催により、帰宅時にキッチンカーを利用する機会が生まれ、C.大宮門街前にキッチンカーがある風景の印象が強まることで、キッチンカー文化が広がり、日常のストリートランチの売上にもつながることを期待している。また新たな出店者や企画の担い手も出てくるだろう。そのようなプラスの循環へ入っていけるように今後もさまざまに仕掛けていきたい。

[酒井伸子]

図6 山丸公園での開催風景

● STREET TERRACE

POP-UP@ Miyacho Square

移動型利活用ユニットによる 滞在空間の創出

産＋学と連携した 実践的研究

ストリートランチ（pp.30–31）の拠点としている都市計画通路の道路予定区域において、移動型利活用ユニット（以下、POP-UPユニット）の設置・運用を通じて、滞在空間や飲食空間としての活用の可能性を検証することを目的に「POP-UP＠Miyacho Square」を実施した［図1］。本取り組みは、日野自動車プロダクト推進部クリエイティブスタジオと芝浦工業大学環境設計研究室との共催で行い、POP-UPユニットの滞在空間づくりの可能性についても検証した。

POP-UPユニットは、日野自動車が開発中の車載型ユニットをベースに、UDCOが広場活用の知見を活かしてデザイン監修を行い、日野自動車が製作した。トラックに載せ移動し、電動の脚部によってスムーズに降ろすことができるため［図2］、設置が少人数で容易に行える。キャスターが付いており、活用地においても配置変えが可能である。メッシュターポリンの壁面はヒンジによって外側に開くことで庇になり日影をつくる。4面全方向に対して開くことができるため、設置する場所の特性や用途に合わせて工夫ができる。また蓄電池が搭載されており、太陽光発電のパネルを活用すればオフグリッドで電気使用が可能となる。

屋根付き 滞在空間へと 変形する什器倉庫

活用時間以外はユニット内部は什器類を収納する倉庫になる。つまりPOP-UPユニットは、屋根付き滞在空間と什器収納のふたつのモードをもち、スムーズな変形や移動によって切り替えられる。公共空間の持続的な活用においては設営／片付けを容易にし負担を軽減することが課題となるが、少人数で簡単に準備撤収ができるPOP-UPユニットは、活用のハードルを下げ利用者の幅を広げることができる。

図2｜壁面はメッシュターポリンで、ヒンジによって跳ね上げると庇になる。ユニット4隅の脚が電動で上下し、トラックから降ろされる

2023年10月7日〜10月14日の期間中に、ストリートランチを3回、夜間の飲食空間創出である「ストリートディナー」を2回実施した。ストリートディナーにおいては、キッチンカー2台とPOP-UPユニットによって、飲食を楽しむ屋外滞在空間を創出することができた［図3］。宮町2丁目の暫定地のように、駅前の賑わいから少し距離のある場所は、キッチンカーの売り上げなどの面においては中心地と比較して不利な条件ではあるが、滞在時間の長いゆったりとした親密な雰囲気の空間創出ができる可能性の高さを確認できた。

さまざまなモードをもつPOP-UPユニットは、可動性がありながら倉庫や電源といった「インフラ」的特性を備えており、さまざまな展開が考えられる。滞留空間や販売拠点としての活用のほか、例えば電気使用を伴う屋外空間の活用につながり災害時にも助けになる。今後も各社と連携を取りながら、別の空間タイプや用途でも実験を行っていきたい。［伊藤孝仁］

図1｜POP-UP@Miyacho Square フライヤー

図3｜ストリートディナーの様子

STREET LOCAL NETWORK

ストリートローカルネットワーク

ひとが まちの魅力に出会う 機会づくり

- マチミチミーツ 36
- ストックツアー 38

#3

STREET LOCAL NETWORK

マチミチミーツ@おおみや

ひとを知ることを通じて まちに関わるきっかけとなる交流会

2020年からのコロナ禍によって、市民同士で気軽に集まる場づくりが実現しにくい時節が続き、その結果オンラインによる勉強会や講演などが盛んに実施されるようになった。コロナ禍が明けた今、気軽に対面形式で集まり、新たな「人」との出会いが生まれる「まちづくりへのはじめの一歩」となるような場所の重要性が高まっている。そこで、大宮近郊で活動されている方（以下Talker）によるショートプレゼンと地元店提供の飲食片手に語り合う時間がセットになった住民参加型交流会「マチミチミーツ@おおみや（以下、mmm）」を開催することになった。まちに関わるきっかけとなり、Talker含む参加者同士のつながりを育むことを目的とし、交流のなかで思いやスキルを重ね合わせ、多様なネットワークを構築し、その先に主体的な活動へとつながっていく「苗床」となることを期待している。

企画を立ち上げる際、「としま会議」[*1]代表の中島明さんに話を聞き、実際に「としま会議」に参加して、本企画の参考としている。

まちとみちでであう 楽しげな光景を 思い描く

「マチミチミーツ@おおみや」は、キャッチコピーを「まちとみちでであう」とし、メインビジュアルを製作した[図1]。我々が思い描いているまちでの楽しげな光景として、これまでにUDCOが実施してきた取り組みを大宮在住のイラストレーターに描いてもらった。

ここでの「マチ（街）」とは空間だけにとどまらない、人の活動や文化なども含めた総体であり、「ミチ（道）」は移動するための機能ではなく、人と街をつなぐ場として捉えている。そして「ミーツ（出会う）」とは知る、見つける、再発見することで、まちを楽しんでほしいという思いを込めている。

「おおみや」は平仮名表記とし、示すエリアを大宮駅周辺に限定するのではなく、大宮駅から数駅、もしくは車で30分以内程度の大宮近郊と設定している。おおみやに住んでいる、学んでいる、働いている、遊びに来るといった参加者が、おおみやで魅力的な活動をしている人のことを知り交流することで、まちと出会い、まちを楽しむ姿へとつなげていく。

地域の人が まちに関わる 間口を広げていく

mmmは地域の人がまちに関わる間口を広げるための企画であるが、立ち上げ時は気軽に参加して欲しいと伝えても、認知が低く実際には難しいと考えた。またUDCOの活動やまちづくりにアンテナを張っていない方にも届けていくために、毎回具体的なテーマを設定し、興味・関心を通じた参加を期待した。その結果、vol.01–02と多くの方々に参加してもらった[図2]。一方で、テーマが具体的に限定されていると参加者の属性が絞られてしまう懸念もある。いずれは「まちで面白いことをしている人を知ることができる楽しそうな会」として捉えてもらえるようにテーマ設定を広義的にしていきたい。

次に情報発信として「Instagram」（@machi_michi_meets）を積極的に利用することとした。Talkerに告知を協力してもらうことで、Talkerのフォロワーへも情報を届けることが出来る。開催記録としてはブログである「note」（https://note.com/machi michi meets）を利用し、各回のレポート記事を残すこととした。これは各Talkerの記事も含め、おおみやで活躍する方々の情報を積み重ねていくことにもつながる。

また、子育て中の方にも参加してもらえるように当日は託児コーナーも用意した[図3]。子どもを育てるなかで、まちへの関心が強まったり、関わりをもちたいと思うようになった方々をまちへつなげたい。

活動者の話を聞き 会話を楽しむ 気軽な場

mmmは全体で2時間30分、Talk TimeとEat Timeの2部構成としている。Talk Timeでは4名のTalkerがショートプレゼン（各10分程度）を立て続けに行う[図4]。休憩を挟み、地元の飲食店の軽食と飲み物を提供しながらEat Timeへつなぐ。Eat Timeでは、参加者を4つのグループに分け、各グループにTalkerが入った6人程度で、飲食を片手に自己紹介をし会話する[図5]。参加者とTalkerの間では、プレゼン内容に対する質問や情報交換など、自然と会話が弾んでいた。会話を深めてもらいたい思いから、グループチェンジは1回程度としている。そのため、質問したいTalkerとグループが一緒になれない場合もあり、mmm終了後に会場に残って会話を続ける様子も見られた。

なお、プレゼンではTalkerの活動初期の思いを生の声で聞くことで、参加者が何か始めるうえでの背中を押せればと考えているため、活動を始めるきっかけや経緯を話していただくように依頼している。参加者からは「刺激になった」「自分も何か始めたいと思った」など前向きな感想が出た。また「会話のなかで新しい価値観に気づいた」「人と話す時間が楽しかった」など交流の時間に価値を感じる声もあった。

Vol.01｜子どもも大人も楽しいまち
日時 2023/7/30［日］13：30–16：00
会場 まちラボおおみや
Talker
釘宮葵［合同会社十色］
井神有沙［給食カフェ1年6組］
矢農祐規子［大宮プレーパーク・ねっこの会］
竹内健二［自分デザイン］

前述の通り、mmmは子育て中の方にも参加を促したいという思いから、最初のテーマは「子どもも大人も楽しいまち」とした。参加者は大人21名と子ども9名であった。赤ちゃんから小学生までが託児スペースで楽しんでおり、その声が会場にも聞こえて柔らかな雰囲気で開催できた。参加者の世代は10～50代、さいたま市在住の方が72.2%であった。

Talkerの釘宮さんからは、農の世界へ入った経緯や手触りのある農作業の魅力についてお話しがあった。井神さんからは、大学生による子育て支援として始めたシェアキッチンを使ったカフェ運営についてであり、矢農さんからは、自身の子育てで感じた悩みから始まったプレーパーク活動についての説明があった。そして竹内さんからは、地域課題と向き合う体験教室についての紹介があり、それぞれ違う角度からのプレゼンだった。後日、元々子どもの遊びを自主企画していた参加者がプレーパークと連携した企画を始めるなど、活動の展開が早くも起きはじめている。

Vol.02｜みどりがつないでいくまち
日時 2023/10/22［日］13：30–16：00
会場 まちラボおおみや
Talker
草薙仁［Nagi Greenworks］
平野史人［INAKA PROJECT］
村田行雄［九霞園］
伊藤司貴［ウッズマート］

vol.02はまちのみどりに焦点を置いたテーマとした。参加者は大人20名と子ども3名であった。その参加者にはvol.01のTalkerが3名いた。世代は20～50代、さいたま市在住の方が70%であった。草薙さんからは、ユーカリの葉を使ったリースづくりによるみどりの香りと手触りの体験と、花屋だけにとどまらない地域に開いた活動の紹介があった。平野さんからは、都心での生活のなかに自然体験を取り込む暮らし方について、村田さんからは、盆栽町の歴史と今の課題についての話があった。伊藤さんからは植木業界の魅力を伝える活動紹介があった。mmm終了後には希望者と外に出て、大宮門街前で展開しているストリートプランツを実際に紹介しながら交流を深めた。

note（下記QR）に、より詳細なレポートを掲載しているので合わせて確認してもらいたい。次回vol.03は4月20日開催予定。開催場所を大宮駅東口駅前にあるOM TERRACE（雨天時は会場変更）とし、オープンな場所で開催することでより多くの方にmmmを届けていくように準備を進めている。

［酒井伸子］

*1——としま会議｜2014年8月からスタート。まちを楽しむきっかけ、まちとつながるきっかけとなる場を目指し、“豊島な人々”をジャンルや世代を越えて集め、豊島区のさまざまなヒトやコトを紹介しながら、参加者同士の交流を促すサロン型イベント

図1｜メインビジュアル

図2｜Vol.01集合写真

左・図3｜託児スペース｜右・図4｜Talk Time　図5｜Eat Time

STREET LOCAL NETWORK

地域ストックツアー

隠れた空間資源を掘り起こし まちの魅力へつなげていく

おおみや地域ストックツアー

大宮の魅力を高めるには、地域の人々の特色ある活動がまちに広がり、根ざしていくことが重要である。社会実験における試みを日常化するためには、プレイヤーがまちに拠点をもつ必要があるが、現在の大宮の賃料相場は高く、出店に向けた一歩をふみだす場や機会に乏しい。このような背景のなかで、2021年に「さいしんまちづくりファンド@大宮」という資金調達支援の仕組みづくりに関わり、「大宮地域ネットワーク」という民間まちづくり事業の推進支援の体制を構築した。具体的な取り組みとしては「おおみや地域ストックツアー(以下、ストックツアー)」を実施している。これは一般的な不動産情報に流通していない「隠れた空間資源」を発掘し、利活用に興味のあるプレイヤーとともに巡るツアープログラムである。実際の空間を体験しイメージを膨らませ、オーナーから直接物件の背景をうかがう。また、先行活用事例も巡ることでエリアの特色を感じ取ることも意図している。

2022年度のストックツアーでは利活用しやすい空き家・空き店舗を見つけることができず、空間資源をどのように発掘するかが課題となっていた。2023年度は、下記のことを実施した。

1 住宅地図調査および踏査を通じた候補物件の洗い出し
2 訪問/手紙を通じたオーナーへの企画伝達

東口駅前の中心地から徒歩10～15分程度の距離感にあり、近年空き家・空き店舗を活用した個人店舗が増えつつある高鼻町・土手町・堀の内町・天沼町・浅間町・吉敷町を中心に調査を行なった。対象候補となった物件は下記のふたつの特性が挙げられる。

1 大宮駅周辺の都市構造に由来する、奥まった土地にあり接道が取れていない物件
2 オーナー事情により一般的な不動産情報に流通しない物件

1においては、必要に応じて耐震補強などの是正工事にオーナー側がどこまで負担する意識があるかが利活用の鍵になる。

2においては、個別の状況に合わせた柔軟な契約が必要となり、顔の見えるかたちでの調整が重要である。結果的に、2件の空き家のオーナーが主旨に同意し、ツアーの対象とすることができた。

図1 ストックツアー風景

テンポラリー(仮設)からストック(常設)へ

2024年3月16日[土]に実施したストックツアーへの参加者は12名であった。本ツアーは、ストックを巡るだけでなく、参加者同士が交流するネットワーキングの役割も担う。また普段あまり通らない道を歩き、大宮の新たな奥行きに出会うまちあるきの機会にもなる。オーナーが同意してくれたふたつの物件のうち、吉敷町2丁目の物件は、氷川参道から横道にそれたすぐの場所にあり、外観からは想像できない部分に小さな庭があるなど、魅力的な環境となっていた。もうひとつの天沼町1丁目の物件においては、南側の大きな庭を含めた利活用のイメージが参加者のなかで膨らんでいた。

物件活用に向けた申し込みもあり、今後はまちづくりファンドの仕組みを通じてハード整備における融資条件面での支援を実施するために、スキームの具体化を行なっていく。

ストックツアーやまちづくりファンドの活動は、「ストリートインキュベーション」の実施に向けた重要な役割を担う。そこで、「中心(center)−周縁(fringe)」「仮設(temporary)−常設(stock)」の軸をとった「UDCOプロジェクトマトリクス」[図2]を作成し、UDCOの活動の変遷やストックツアーやまちづくりファンドの位置付けを整理した。

ストリートにおける小さな実験(仮設)を、新規出店やまちづくりの新しい担い手の登場、ひいては将来的な駅前広場の活用など大きな都市構造の充実につなげるために、仮設から常設へのステップを担う本取り組みは重要であり、UDCOのほかの取り組みとエコシステムを形成していくことを目指していきたい。 [伊藤孝仁]

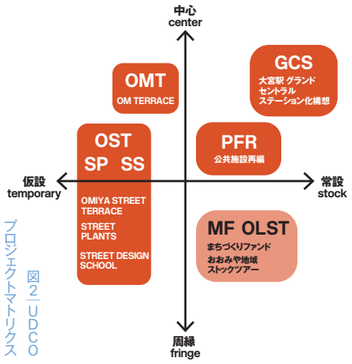


図2 UDCOプロジェクトマトリクス

STREET LOCAL NETWORK

産官学民連携 まちラボおおみや OM TERRACE UDCO PAPER UDCO REPORT

地元まちづくり団体などを支援する
産官学民連携

UDCOでは産官学民のプラットフォームとして、各主体とのネットワーク構築や連携強化を目指し、それぞれの活動に関する専門性の高い支援、意見交換、地域の情報収集などを継続的に行っている。

○「民」:地元まちづくり団体など

会議の実施サポートやファシリテーション、大宮のまちづくりに関する専門的なアドバイスを行っている。

○「学」:大学等研究機関など

芝浦工業大学とストリートプランツの効果測定調査を行い、大宮のまちづくりに関する協同研究を進めている。

○「産」:民間企業など

大宮の企業とプロジェクトを展開するための協議や、公共空間利活用の情報やノウハウの共有を行っている。

○「官」:行政・自治体など

さいたま市各課からの事業相談を受け、取組を横つなぎするために、連携方法について提案するなど事業推進に向けた協議を行っている。

地域との関係性をつくる
まちラボおおみや OM TERRACE

UDCOは駅前にオフィスを構え、日常的に市民や事業者とコミュニケーションをとることで、地域との関係性づくりを試みている。

また、UDCOの活動や大宮のまちづくりの状況を模型や動画により展示したり、大宮のまちづくりを目的とした集会利用などに貸し出し可能な「まちラボおおみや」を運営している。

「OM TERRACE」屋上スペースについても、人数制限やイベント自粛などの状況に応じた方針を示すことで、安全を確保しながら運営を継続している。

市民の方々に向けて、大宮というまちに興味をもち、まちへの思いを語り、まちづくりに参画していく。「関わりしろ」をつくることを目的に、UDCOではさまざまなメディアをつかった定期的な情報発信を続けている。

対面でのコミュニケーションが戻りつつあるため、オフラインでの交流機会もつくりながら、それぞれの強みを活かしたハイブリッドな情報発信に取り組んでいきたい。

大宮のひと・まちを発信する
UDCO PAPER UDCO REPORT

大宮で活動する「ひと」「まち」に関する情報を整理し、広く共有することもUDCOの役割のひとつである。

大宮の「ひと」に注目し、その魅力に焦点をあてた「UDCO PAPER」を不定期に刊行している。

「まち」を発信する媒体としては、取組をリアルタイムで発信するウェブサイトやSNS、本誌「UDCO REPORT」がある。「UDCO REPORT」はUDCOの年間活動報告として、また大宮のこれからのまちづくりを考えるうえでの重要なテーマで特集を組んでいる。

UDCO年表2023

ビジョン推進と日常化に向けた仕組みづくり

1 | [活動報告]

ストリートデザインスクール

20日　開校
[現地プログラム #1]

9日　フィードバック
[現地プログラム #2]

23日　中間報告会
[現地プログラム #3]

21日　フィードバック
[現地プログラム #4]

23日　アウトプット | 社会実験 #1
- BACKSTREET (DANCE) PARK

アウトプット | 社会実験 #2
- Nakasendo Chrono Market

[現地プログラム #5]

16日　成果報告会
[現地プログラム #6]

ストリートマーケット

3日　大宮盆栽春祭り
(主催:さいたま市)
@大宮門街前歩道部[-4日]

18日　大宮門街
1周年アニバーサリー
(主催:大宮門街)
@大宮門街前歩道部[-19日]

28日　ストリートマーケット
@大宮門街前歩道部
[同日開催イベント]
OMIYA DAIMON MARKET
(主催:大成総合不動産)
@大宮門街広場

マチミチミーツ

30日　マチミチミーツ
@おおみや
vol.01

22日　マチミチミーツ
@おおみや
vol. 02

ストリートプランツ

21日　GIAP#10
第4回未来ビジョン/アクションプラン　部会
第1回大宮駅西ログリーンコミュニティ　部会
第5回 STREET PLANTS 部会

28日　GIAP#11
第6回 STREET PLANTS 部会

21日　ストリートプランツ
@大宮門街前
@中央通り
[-11月30日]

1日　ストリートプランツ
@山丸公園
@大宮区役所
[-28日]

25日　GIAP 現地視察
@シモキタ園藝部

21日　GIAP#12
第7回 STREET PLANTS 部会
第2回大宮駅西ログリーンコミュニティ　部会

ストリートランチ

–　**ストリートランチ**
@逸見ビル前
@宮町2丁目交差点角
@大宮門街前
[定期開催]

1日　ストリートランチ
@山丸公園
[-28日]

20日　BEER TERRACE
@大宮門街前歩道部
[同日開催イベント]
OMIYA DAIMON MARKET
(主催:大成総合不動産)
@大宮門街広場

ポップアップ

7日　POP-UP
@宮町2丁目
交差点角
[-15日]

ストックツアー

9日　ストックツアー

2 | [情報発信]

情報発信

11日　まちづくりセミナー
(主催:UDC信州)登壇

1日　第4回大宮 GCS
まちづくり調整会議

16日　芝浦工業大学
研究成果報告会

他

現地視察

19日　立川市現地視察

9日　前橋市現地視察

25日　UDC 会議 in 神戸

16日　札幌市現地視察

UDCOアクションプラン＃006

大宮駅周辺地域戦略ビジョンの推進に向けた仕組みづくりへ

大宮駅周辺地域の動向を見据えながら、3つのアクションがそれぞれに連関し、「運命の10年」のなかで提言や実践を行っていくUDCOの行動計画を示す。

UDCOは、産官学民連携の基本理念のもと、Design Research Action / Public Action / Platform Actionの3つのアクションによって、「大宮駅周辺地域戦略ビジョン」（2010年策定）を地域が一体となって具体的に展開できるよう推進し、大宮らしいまちづくりを進めるためのデザインおよびマネジメントを進めている。その核となるのが「ストリートデザインまちづくり」である。

産 民間企業 / 官 自治体・NPO等 / 民 市民・地域団体 / 学 大学等研究機関 / UDCO

2016 [H28] | 2017 [H29] | 2018 [H30] | 2019 [R1] | 2020 [R2] | 2021 [R3] | 2022 [R4] | 2023 [R5] | 2024 [R6] NOW! | 2025 [R7]

2010 大宮駅周辺地域戦略ビジョン策定

社会情勢

首都圏広域地方計画「運命の10年」

- 都市再生緊急整備地域指定
- 国土強靱化基本計画
- 2018年記録的猛暑
- 令和元年房総半島台風
- 令和元年東日本台風
- グリーン成長戦略
- さいたま国際芸術祭2020
- 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会
- ネイチャーポジティブ COP15
- 第三次国土形成計画「シームレスな拠点連結型国土」
- 埼玉県における緊急事態措置／蔓延防止等重点措置
- 5類感染症へ
- さいたま市SDGs未来都市計画
- さいたま市緑の基本計画改訂にともなう大宮でのリーディングプロジェクト検討
- さいたま市スマートシティ推進事業が国土交通省スマートシティモデルプロジェクトに選定

大宮駅東口周辺地域の動向

- 大門町3丁目中地区再開発事業
- 大門町2丁目中地区再開発事業
- 大宮区役所新庁舎
- 大宮駅GCS化構想
- 公共施設再編

- 竣工予定 大宮門街オープン（4月）
- 竣工
- GCS化構想策定
- OM TERRACE OPEN
- 東日本連携センターOPEN
- 氷川参道一部区間歩行者専用化
- 氷川緑道西通線南区間供用開始
- 大宮GCS化プラン2020策定
- まちづくり戦略［みどりが人を呼ぶシーンをつくる］
- 東口駅前広場の都市計画手続き
- 新東西通路の都市計画手続き
- 東口駅前広場の事業認可取得
- 都市計画決定
- 2025着工－2028年竣工予定
- 旧大宮図書館リノベーション施設 Bibliオープン（12月）
- 特例道路占用許可取得（大宮門街前歩道部）（2023年10月）

ビジョン推進

課題のインプットと価値形成に向けた視点の形成 ／ 新たな公共的空間を対象に取組を展開 ／ 相互に連携し空間再編とマネジメントの連動へ

ビジョンの推進に向けた課題の明確化
- 公共空間の利活用に関する調査・検討
- 景観形成に向けた調査・検討
- デザインコーディネートに関する調査・検討

ビジョンの推進に向けた仕組みづくり
- 種々の調査・検討を踏まえたデザインコーディネートの仕組みづくりを行う

仕組みの定着による持続的なビジョンの推進
- 仕組みを定着させ持続的なデザインコーディネートを行う

ビジョンの実現＝大宮らしい新たな日常の実現

UDCOの3つのアクション

UDCO設立

1 | 大宮のストリートをデザインする
DESIGN RESEARCH ACTION［実験の層］

エリアマネジメントにつながる街路公共空間利活用の社会実験や、デザインコーディネートの仕組みづくりに向けた調査研究などを行う。

景観調査 / ストリートメディア / ストリートテラス / ストリートランチ / ストリートブランツ / ストリートテーブル / OM TERRACE屋上利活用

2 | ストリートからまちづくりへ
PUBLIC ACTION［実践の層］

戦略ビジョンに掲げられた4つの「優先的に取り組むべきプロジェクト」（大宮駅グランドセントラルステーション化構想や公共施設再編などの大宮駅周辺地域で進められている各種事業）を通じて、豊かな公共空間の創出のためのデザインマネジメント（事業と事業の相互調整）や、エリアマネジメントの仕組みづくりを行う。

大宮GCS構想 / 公共施設再編 / ストリートデザイン / 公共空間利活用 / グリーンインフラ

3 | 大宮のまちづくりをつなげる
PLATFORM ACTION［プラットフォームの層］

大宮のまちづくり団体や企業、大学、行政の活動を支援・連携をするとともに、大宮のまちづくりやUDCOの取組を大宮内外に発信することで、産官学民のプラットフォーム機能を構築し、大宮らしい都市文化の発信を目指す。市民がまちづくりに関わる機会の創出やまちづくり団体の活動支援、ウェブサイトやSNSなどによる情報発信に取り組む。

大宮らしい都市文化の発信を目指した産官学民のプラットフォーム構築

ストリートデザインスクール / まちづくりファンド / 地域ストックツアー

社会実験
街路／公共空間利活用の社会実験
- おおみやストリートテラス［2017-］
- OM TERRACEの屋上利活用［2017-］
- ストリートランチ［2019-］｜● ストリートブランツ［2019-］

調査研究
デザインコーディネートの仕組みづくりに向けた調査研究
- 景観調査［2018-］｜● 誘導体制に関する調査［2019-］

体制構築日常化
街路／公共空間利活用の持続的体制構築
- おおみやストリートテラス@一番街［2020-］
- おおみやストリートテラス@中央通り［2021-］
- ストリートランチ@キッチンカーテラス、軒先テラス［2020-］
- ストリートランチ@大宮区役所［2021］
- ストリートランチ@大宮門街［2021-］
- ストリートブランツ［2020-］

調査研究
デザインコーディネートの持続化に向けた調査研究
- スクール／事業創出／まちづくり資金に関する調査［2020-］

空間再編
空間再編と連動した街路／公共空間利活用
- ストリートランチ@大宮門街・山丸公園［2023-］
- ストリートブランツ［道路利活用・都市公園利活用］

エリアマネジメント
エリアマネジメント組織の構築・運営支援
- おおみやストリートテラス実行委員会
  ストリートマーケット
  ストリートブランツマーケット［2021-］
  ストリートワードローブ［2023-］
  ストリートビアテラス［2024-］

事業支援課題共有
公共事業支援と課題共有
- 大宮駅グランドセントラルステーション化構想デザインコーディネート［2017-］
- 公共施設再編を契機とする連鎖型まちづくりの推進［2017-］
- 氷川参道歩行者専用化区間景観コーディネート［2018］
- さいたま新都心エリアマネジメント検討支援［2018］

仕組みづくり
デザインコーディネートの仕組みづくり
- 大宮駅周辺グリーンインフラ推進戦略体制構築支援［2021-］
  → GIAPの設立（大宮駅周辺グリーンインフラ公民連携プラットフォーム）［2022-］
- さいたま市スマートシティ推進コンソーシアムとの事業連携［2022-］

ビジョン共有
公民が共有するアクションプランの作成
- グリーンインフラ推進戦略／アクションプラン検討支援［2023］

ガイドライン
公民連携プロジェクトのガイドライン作成
- ストリートデザインマネジメントガイドライン［2023］

相談助言
公民の取組に関する相談・助言
- さいたま市によるウォーカブル施策／グリーンインフラ施策スマートシティ／地区交通プラン等の相談・助言
- 武蔵野銀行他による大宮駅西口グリーンコミュニティプロジェクトに関する相談・助言［2023］

発掘
産官学民のプラットフォーム構築
- 市民がまちづくりに関わる機会を創る
- 地元まちづくり団体などの活動を支援する
- 地域との関係性を創る
- 大宮のひと・まちを発信・共有する

構築
実践を通じたプラットフォームの拡充
- ストリートデザインスクール@大宮［2021-］
- まちづくりファンド［2021-］
- 地域ストックツアー［2022-］
- UDCO PAPER・REPORT・LIVE・SYMPOSIUM

発信
大宮らしい都市文化の発信
- UDCO PAPER・REPORT
- 地域ストックツアー

運用
プラットフォームの運用
- ストリートデザインスクール@大宮
- マチミチミーツ［2023-］

初動期 ／ 展開期 ／ 波及期

ストリートからアクションをおこす → グリーンによってアクションをつなぐ → アクションからネットワークをつくる

＊2024年3月時点の想定を示す

2023年度のふりかえり/2024年度に向けたUDCOの思い

工藤和美｜センター長

2023年は氷川神社例大祭・大宮中山道まつりが4年ぶりに行われ、伝統を引き継ぐ大宮の日常が戻りました。人々が集い、次の世代へ引き継がれる文化は、大切なまちづくりの風景のひとつです。UDCOはこれまでさまざまな取り組みを通じて“通り”の役割を考えてきました。ストリートデザインスクールの活動を通じて地域で活躍する方々を育てたり、マチミチミーツを通じて普段まちづくりに関わる機会が少ない方々でもまちを知れるきっかけをつくるなど、“通り”をきっかけに地域の人々がつながるということがまちの文化となればと思います。今後も専門家としてまちの未来に貢献できればと思いますので、引き続きみなさまのご協力を宜しくお願いいたします。

内田奈芳美｜副センター長/ディレクター

公共空間の利活用や社会実験を軸に今年度を振り返って見ると、やはり異常な暑さが続いたということが大きなインパクトだったと思います。屋外の気持ちよさ、楽しさは気候とも直結しますので、そういった気候条件が今後も引き続き影響してくるかもと考えると、UDCOの公共空間の活用のあり方も変わっていかないといけないのかもしれません。そうなると、プランツのような緑の存在はより重要になりますね。

また、ストリートデザインスクールの卒業生のみなさんがマーケットの運営を進めていったり、スクールが目指した「水平展開」が進んできたというのはとても素晴らしいことだと思いました。そうやって、まちとしてのエコシステムが確立されていくのだなと思います。

藤村龍至｜副センター長/ディレクター

今から5年前、NYCで交通局長を務めていたジャネット・サディク=カーンが来日し紹介した「ウォーカブル」というキーワードは、第2次安倍政権下での道路関連法改正のタイミングと重なり、わが国のまちづくり行政に大きく影響を与えました。UDCOの活動のベースにもなりましたが、基礎自治体の現場では管理担当者はともかく計画担当者でも心酔する人と毛嫌いする人に分かれています。先日、5年ぶりに再来日したジャネットは、わが国での成果を評価しつつ「KeepFighting!」と檄を飛ばしていました。世界トップクラスの官僚主義の権化であるニューヨーク市役所交通局を動かし、市民を味方につけた本人が言うと嫌味なくすっと胸に入ってきます。我々も闘い続けたいと思います。

石黒卓｜サブディレクター/デザインコーディネーター

UDCO設立から7年、ストリートでの実践を波及するスクールは3年を経て、大宮のストリート界隈を担うプレイヤーが互いに協働しはじめ、一連の公共空間利活用は波及期を実感しつつあります。新旧交えて複数のチャンネルから連鎖が続くようにコーディネートに努めたいところです。また、2023年はプレイヤー発掘や協働のための組織づくりや中間支援を担う組織のあり方に関する視察依頼が多く、次々と新しいプロジェクトを生んでいるとの見え方のようで、プレイヤーの皆さんが発する利活用の成果にも起因するものと思っています。一方で、大きなまちづくりとの接続については課題とも思えており、大宮駅・公共再編などの都市整備や行政のウォーカブルやグリーンの戦略に関して、相乗効果を得られる空間計画と利活用の連動を導く必要があると感じています。2024年度もさらなる展開に努めます。

伊藤孝仁｜デザインコーディネーター

まちに主体的に参加するための気軽な一歩を踏む機会として、新たに「マチミチミーツ」をスタートさせました。ただお客さんとしてまちに関わることに危機感を感じている住民がたくさんいることに驚き、「クラブ」のような場所における出会いが、まちに定着していくための活動が大切であることに気づきました。またスクール修了生がまちとの関係を一層深め、大宮のコンテンツを公共空間で再発見する取り組みを実践している様子は頼もしく、ストリートインキュベーションの展開を感じます。「おおみや地域ストックツアー」では大宮の隠れた空間資源の可能性に触れました。ストリートにおける仮設的な挑戦が拾い上げ育てたカルチャーを、将来的な駅前広場を含む常設的な魅力につなげていくための活動も、今後充実させていきたいです。

高橋卓｜デザインコーディネーター

いまや「住みたい街」ランキング上位に名を連ねる大宮、次なる目標は「住み続けたくなる街」ではないでしょうか。大宮のみなさんと「まちを自分のものにしていく感覚」を醸成することで次につなげていけたらと考えています。

昨年実施したSTREET MARKETは、スクール修了生が歩道部と大宮門街広場それぞれにコンテンツを仕掛けることで、民地と公共空間の一体利活用を成し遂げました。地元や沿道事業者と組んだことで継続の声も上がり、関わった方々はまちに対する当事者意識が芽生えたのではないでしょうか。UDCOは7年かけて支援のかたちを変えてきましたが、その萌芽が見えつつあります。関わり続けたくなる取り組みによって住み続けたくなるまちへ、みなさんとともに向かっていきたいと思います。

森元気｜デザインコーディネーター

UDCOに参画して3年が経ち、いよいよ「コロナ禍」という言葉も使うことがなくなりました。制度の面においても、これまで社会実験などで活用していたコロナ禍での道路占用の緩和措置も昨年度に終了し、今年度から大宮門町前の歩道部では、都市再生推進法人として都市再生特別措置法に基づく特例道路占用制度の活用を行いました。新たな制度活用に際して道路管理者や交通管理者などとの協議を繰り返すなかで、道路空間における公共性や公益性についてあらためて考える機会となり、公共空間活用の前提条件として今後の取り組みに活かしていきたいと思います。また、我々の意図や価値を理解いただき、公共空間でのさまざまな取り組みの許認可に関わる、さいたま市やさいたま警察の方々にはあらためて感謝いたします。今後とも引き続きよろしくお願いいたします。

酒井伸子｜デザインコーディネーター

「ストリートデザインスクール」を受講、2023年4月からUDCOに参画し、“住む”だけだった大宮が“関わる”対象となり、まちの見え方ががらりと変わりました。まちなかを歩いていたら、UDCOで関わった方にばったりと会うことが増え、自分が大宮に根ざしはじめたことを嬉しく思っています。

UDCOに関わり、まちは地域一人ひとりの集合体でできていると実感するとともに、大勢の人の意識がまちへ向いていない現状にも気づかされました。その気づきを大切に、誰でも気軽に楽しく参加できる「マチミチミーツ」を始動したことで、これまで関わりがなかった方々に届きはじめた実感があります。今後も大宮とその周辺の魅力的なプレイヤーとともにさまざまな活動を展開していきます。

ABOUT UDCO

名称

アーバンデザインセンター大宮（UDCO）

*UDCOは「一般社団法人アーバンデザインセンター大宮」が運営する任意組織 ▶▶図1

設立年月日

2017年3月31日設立
2017年4月1日運営開始

主な活動エリア

「大宮駅周辺地域戦略ビジョン」（2010）の対象となる大宮駅を中心とした約190haおよびその周辺のエリア

メンバー

- センター長
  工藤和美（東洋大学教授）
- 副センター長／ディレクター
  藤村龍至（東京藝術大学准教授）
  内田奈芳美（埼玉大学教授）
- サブディレクター／
  デザインコーディネーター
  石黒卓
- デザインコーディネーター
  伊藤孝仁｜森元気｜高橋卓｜酒井伸子
- スタッフ
  土田泰子

設立経緯・沿革

「大宮駅周辺地域戦略ビジョン」（2010）策定後、戦略ビジョンをどのように具体化させていくかが模索されるなか、地元からのアーバンデザインセンター開設を求める声をきっかけとして、「しあわせ倍増プラン2013」に「（仮称）アーバンデザインセンター大宮」設置が位置付けられた。その後、暫定的に公民学が一体となって主体的にまちづくりを考えるための情報発信の場として「まちラボおおみや」が2014年に設置される。そして、まちラボおおみやでの産官学民の連携によるまちづくりの試行期間を経て、2017年にUDCOが設置され運営を開始した。

2010年5月
さいたま市「大宮駅周辺地域戦略ビジョン」策定
2013年10月
さいたま市「しあわせ倍増プラン2013」に「（仮称）アーバンデザインセンター大宮の設置」が位置付けられる。
2014年7月
一般社団法人大宮まちラボ協議会が、まちづくりの情報発信の場として「まちラボおおみや」を大宮ラクーン8階に開設。
2016年12月
アーバンデザインセンター大宮の運営業務を担う法人組織として「一般社団法人アーバンデザインセンター大宮」設立。
2017年3月
まちラボおおみやを活動拠点に、市民、行政、企業、教育・研究機関などさまざまな主体が広く連携しまちづくりを推進する基盤として「アーバンデザインセンター大宮（UDCO）」を設置。アーバンデザインセンター大宮（UDCO）の運営を一般社団法人アーバンデザインセンター大宮が担う。
2017年10月
一般社団法人アーバンデザインセンターがさいたま市より都市再生推進法人に指定される。
2020年10月
令和2年度土地活用モデル大賞
「国土交通大臣賞」受賞
「おおみやストリートテラス」
2022年3月
第2回グリーンインフラ大賞
都市空間部門「国土交通大臣賞」受賞
「OMIYA STREET PLANTS PROJECT」

基本理念

UDCOの基本理念は「産＋官＋学＋民」の連携である、それぞれの立場で活動するこれらの主体が、広く連携しまちづくりを推進する基盤として機能するため、UDCOはこの基本理念のもと、大宮を新たな時代へと発展するまちにデザインするとともに、良好なまちの形成に向けたマネジメントを提案する。

活動財源

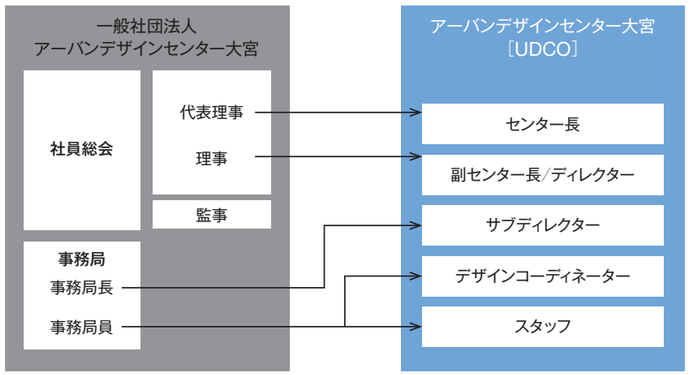
一般社団法人アーバンデザインセンター大宮が、さいたま市都市局都心整備部大宮駅東口まちづくり事務所より「大宮駅周辺地域戦略ビジョン推進業務」を受託し、その受託費を人件費などの活動財源としている。また、大宮でのスクール事業や大宮以外におけるコンサル業務にも活動を広げ、それらの売上も財源としている。

運営母体組織

- **名称**
  一般社団法人
  アーバンデザインセンター大宮
- **社員**
  工藤和美：代表理事
  藤村龍至：業務執行理事

*2024年3月時点の情報です。

図1



用語解説

● **UDC：アーバンデザインセンター**｜UDCは、アーバンデザインセンター（Urban Design Center）の略称で、2006年11月の柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）創設時に構想された、課題解決型＝未来創造型まちづくりのための公・民・学連携のプラットフォーム。行政都市計画や市民まちづくりの枠組みを超え、地域に関わる各主体が連携し、都市デザインの専門家が客観的立場から携わる新たな形のまちづくり組織や拠点として、2023年4月現在は、全国22拠点に展開している。それぞれのUDCで課題やプレイヤー構成は異なるが、UDCOは政令指定都市（100万人都市）の既成中心市街地におけるUDCとして、ほかのUDCとは異なる特徴をもっている。

● **都市再生推進法人**｜都市再生推進法人とは、都市再生特別措置法にもとづき、地域のまちづくりを担う法人として市町村が指定するものである。指定されることにより公的位置付けが付与され、国などの支援を受けながら、都市再生整備計画の市町村に対する提案や都市利便増進協定・低未利用土地利用促進協定などを結ぶことが可能となる。一般社団法人アーバンデザインセンター大宮は、さいたま市から2017年10月4日に都市再生推進法人に指定された。

● **まちラボおおみや**｜産・官・学・民が一体となり、これからの大宮のまちづくりについて議論し、情報発信する拠点となるコミュニティ・ステーション。

● **大宮駅周辺地域戦略ビジョン**｜大宮駅周辺地域のまちづくりの将来ビジョンとして、官・民協働でつくりあげたまちづくり計画。大宮駅周辺地域を、政令指定都市の顔としてふさわしい都心として再構築するため、将来像、まちづくりの方針、戦略や優先プロジェクトがとりまとめられている（H22.5策定）。

● **しあわせ倍増プラン2013**｜市民一人ひとりがさらなる「しあわせを実感できる都市」を目指すため、平成25年5月の市長選挙において市長が公約した「新しあわせ倍増計画」にもとづき策定するもの。さいたま市が特に力を入れて取り組むべき施策がまとめられている。

● **首都圏広域地方計画**｜「国土形成計画（全国計画）」を受け、首都圏の自立的発展に向け、概ね10年間の地域のグランドデザインをとりまとめたもの（H28.3大臣決定）。本計画 において、大宮駅周辺地域が東日本の対流拠点として位置付けられる。

● **国土形成計画**｜国土の利用、整備及び保全を推進する総合的・基本的計画。国土形成計画法にもとづき、全国計画と広域地方計画から構成される（H27.8閣議決定）。

● **大宮駅周辺グリーンインフラ公民連携プラットフォーム**｜大宮駅周辺に関わる多様な主体が一体となってグリーンインフラの取り組みを推進し、都市の価値向上と活性化、大宮らしい豊かな生活空間の形成に寄与することを目的とした、公民連携組織である。